

# 万葉論

## 2章 第二卷

### 九州天皇家の真実は万葉にあり

# 挽歌

## 近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の御代 近江天皇挽歌

天皇聖躬不豫の時、大後の奉る御歌一首

147 天の原 振り放け見れば 大君の 御壽は長く 天足らしたり

この歌は題詞と食い違うように見える。題詞は天皇が危篤におちいったと書く。ところが歌は大君の寿命は長く天いっぱい満ちているという意である。危篤で今にも亡くなりそうな時の歌としてどうかと思えるが祈願の歌だと読めないことはない。

近江大津の宮の天皇とは九州天皇家の天皇である。この近江大津宮は琵琶湖大津ではない。天皇家の歴代の宮が存在した小倉南区長野である。

九州天皇家の祖、神武天皇は彦島に存在した妻の里、吉備から東征に出発して企救半島を南下、小倉南区曾根に侵攻し九州の覇者、倭國の長官に勝利、苅田から行橋市を制覇、香春町に神武倭(やまと)國を樹立した。以来、古代九州天皇家は天武まで九州に実在した。聖帝と讃えられた仁徳天皇も小倉北区に高津宮を構えていた。仲哀天皇は彦島老町に豊浦宮を構えていた。景行天皇は最初は田川市に巻向・日代宮を構えていたが、小倉南区で土蜘蛛との戦いに勝利して、ここに宮を構えた。これが日本書紀が伝える「近江國の志賀の高穴穗宮」である。その子、成務天皇もその宮で天下を治めた。

小倉南区曾根の海は干潟の海で、干満の差が激しい。この海に出入りする船が停泊できる湊(大津)はどこにあったのか。古代の史料から探すほかないが、小倉誌、企救郡誌などから現在の竹馬橋付近にその湊があったことが分かる。ここまで海が入っていたとは驚きであるが、満ち潮の時は比較的大きな平底船も入港出港できたのであろう。ここはまさしく潮を待たなければならない港であった。

一書に曰はく、近江天皇、聖躬不豫御病急かなる時、大後の奉献る御歌一首

148 青旗の 木幡の上を かよふとは 目には見れども 直に逢はぬかも

青旗の木幡のあたりを通っていると見えるけれど、もはや直接には天皇にお逢いできないことである。

題詞には「近江天皇」と書かれている。この歌の意を理解するのは難しい。「御魂が木幡のあたり通っている(文学大系萬葉集1頭注)」と理解されている。だがいかに古代人といえども靈魂を見ることはできなかつたと思われるが、近江天皇はまだ亡くなっていないのだから靈魂が体を離れて「木幡」の側を通っていると見えたのかもしれない。「木幡」とは地名である。この地名は古事記の応神天皇、矢河枝比売に登場する。

一時、天皇(応神)近淡海國に越え幸でましし時、宇遲野の上に御立ちしまひて、葛野を望けて歌曰ひたまひしく、

千葉の葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 國の秀も見ゆ  
とうたひたまひき。故、木幡村に到り坐しし時、麗美しき嬢子、其の道衢に遇ひき。

近淡海國とは小倉南区の曾根の淡海をいう。応神天皇は小倉南区の近淡海國に向かい、木幡村に到着した時、美しい乙女に出会った。歌詞の「千葉」は、もちろん、現在の千葉県とは無関係である。「千」は「高千穂」の「千」と同じで、多いという意味である。

応神は乙女に、「汝は誰が子ぞ」と尋ね、乙女は、「丸遷之比布禮能意富美の女、名は宮主矢河枝比賣ぞ」と答える。乙女は、「わに」の「ひふれ」の「近江」の娘であると云う。

「丸遷(わに)」とは出雲神話の「因幡の白ウサギ」に登場する「ワニ」であろう。出雲神話の「ワニ」とは魚の「鱻(フカ)」ではない、人間である。鱻がウサギの皮を剥いだりしない。

小倉南区は出雲王朝の都が存在した処である。小倉南区「稻葉」が古代出雲の「因幡」である。「意富美の女」とはその出身地を表している。「意富美」とは「近江(淡海)」の意である。応神が出会った少女は小倉南区の淡海の「木幡」に住んでいた「わに一族」の娘であった。

木幡村は小倉南区に存在した。近江天皇が亡くなったのは小倉南区長野の「大津の宮」である。近江天皇の柩は小倉南区長野の「大津の宮」を出て、小倉南区の「木幡」を挽かれて通った。そして天皇が埋葬されたのは「鏡山陵」である。

鏡山陵は香春町に存在する。近江天皇の柩は小倉南区長野から「木幡村」を経て行橋市に到り山を越えて香春町まで挽かれていったのである。

#### 天皇崩りまし後、倭大後の作りまし御歌一首

149 人はよし 思ひ止むとも 玉蔓 影に見えつつ 忘れぬかも

人はすぐに天皇が亡くなった悲しみを忘れてしまうであろう。それはそれでしかたのないことであるが、私には面影が残っていつまでも忘れられないことである。……何という歌であろう。大后が歌うように、近江天皇にはさしたる業績もなく、人々の記憶に残ることもなく、一生を終えたと思われる。

#### 天皇崩りまし後、婦人が作る歌一首

150 うつせみし 神に堪へねば 離り居て 朝嘆く君 放り居て わが戀ふる君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく わが戀ふる 君そ昨夜 夢に見えつる

#### 天皇の大殯の時の歌二首

151 かからむ 懐知りせば 大御船 拍てし標 結いはましを

152 やすみしし わご大君の 大御船 待ちか戀ふらむ 志賀の辛崎

九州天皇家の近江大津は小倉南区長野の竹馬橋の近くにあった。その船着場は「志賀の辛崎」と呼ばれていた。近江天皇の船は此処で天皇が船のお乗りになるのを待ち焦がれている。しかし、近江天皇がお乗りになることはもうない。

#### 大後の御歌一首

153 鯨魚取り 淡海のを 沖放けて 漕ぎ来る船 邊附きて 漕ぎ来る船 沖つ櫂 いたく撥ねそ 邊つ櫂 いたく撥ねそ 若草の 孀の 思ふ鳥立つ

「鯨魚」とは鯨のことである。「鯨」は魚と思われていたから「鯨魚」と書かれている。「鯨魚取り」は海にかかる枕詞ではない。捕鯨そのものをいう。大後の歌は捕鯨の実景である。

周防灘では鯨が捕れた。捕鯨船は曾根の淡海の沖から鯨を追って漕いでくる。捕鯨は鯨を曾根の淡海に追い込む方法だったのでしょ。追い込めれば鯨に逃げ道はない。追い込んだら淡海の岸辺で待っている船が鯨を浅瀬へ追い込んでいく。むろん船の漕ぎ手は必死である。櫂が踊り、撥ねる。

だが、近江天皇は亡くなってしまった。捕鯨の船よ。今日はその櫂をひどく撥ねて音を出さないでおくれ。若い孀がかわいがっていた鳥が飛び立ってしまうから。

大後の歌は近江大津の宮が九州天皇家の「近江(淡海)」、つまり小倉南区の曾根の海であることを明らかに

する。日本天皇家の近江(琵琶湖)では鯨は捕れない。

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首

155 やすみしし わご大王の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと  
晝はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつ在りてや 百磯城の 大官人は 去き別れなむ

近江大津宮の天皇は鏡の山に埋葬された。鏡山とは香春町鏡山古墳である。手鏡の形をしている。故に、鏡山という名がつけられている。この古墳は、代々、北の集落の人々によって守られてきた。天皇陵であるが故である。こうして、近江天皇陵は人々に守られながら、ひっそりと香春の稲田のなかにたたずんでいる。



## 日本國天皇家天智天皇

日本書紀が明日香藤原京から近江(琵琶湖錦織遺跡)に都を移したと記述する天皇は万葉集が「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」と書いた天皇とは別人である。同じ「近江」なので区別されず、同一と考えられているが、実は、「近江」は二つあった。一つは九州天皇家の都「近江」である。小倉南区をさす。ここには「吉野の宮」と「大津の宮」があった。九州天皇家の宮の名前は「近江大津の宮」である。従って万葉集が「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」と題詞に書いた天皇は小倉南区長野にあった「大津の宮」の天皇である。

もう一つは日本國天皇家の都「近江」である。琵琶湖近江に遷都し、京都市東山区山科陵に埋葬されたのは日本國天皇天智天皇である。622年白村の海戦で敗れた日本國は近江に遷都した。飛鳥藤原京は唐に知られ尽くされている。近江遷都は防衛上やむを得ない。ここには琵琶湖を使った脱出路がある。日本書紀の天智天皇はそのほとんどが唐、高句麗、百済と日本國との外交関係の記録である。

- (1) 高句麗救援の為の出兵
- (2) 百済救援の為の出兵
- (3) その陸戦の様子
- (4) 白村への派兵と海戦の敗北

- (5) 百濟王朝の滅亡と日本國への亡命
- (6) 唐の百濟鎮將からの使者の来日
- (7) 日本國防衛のための築城

これらの記事記録は日本國天皇家の記録である。仏教を導入し、仏教立国を国家理念として法興寺を建立した上宮聖徳王(聖徳太子)の流れを受け継ぐ関西の日本國天皇家の記録である。

日本國天皇天智の時代、唐、新羅の侵攻を受け危機に陥った百濟王の要請を受けて、日本國天皇家は白村江に出兵した。日本書紀は援軍の知らせを聞いた百濟王の喜びの言葉をそのまま載せている。

今聞く、大日本國の救將廬原君臣、健兒萬餘を率て、正に海を越えて至らむ。願はくは、諸の將軍等は、預め圖るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ。(日本書紀天智天皇)

百濟王が言った「日本國」とは九州天皇家ではない。藤原京を首都とする日本列島の覇者、日本國天皇家である。日本國の天皇は隋、唐、百濟、高句麗、新羅から「天皇」と呼ばれていた。「天皇」とは、当時、日本列島をほぼ統治下においていた日本國天皇家への称号であった。「天皇」とは諡(おくりな)ではなく、現世の日本國天皇の称号である。九州天皇家の王を天皇と呼ぶようになったのは天武が始めてである。

唐との戦いを指揮すべく日本國天皇とその朝廷は前線の博多まで来ていた。日本書紀が「長津宮(博多港)」と書いた宮である。日本國はこれまでにすでに百濟救援のため大軍を派兵していた。白村への救援軍は当時の日本國最後の兵力であった。もはや日本國には兵は残っていない。この一戦に負ければ國は滅ぶ。存亡をかけて、静岡県地方の領主、廬原君臣は唐・新羅の連合軍が待ち受ける朝鮮半島白村の河口に出撃して、そして壊滅した。百濟と日本國連合は白村で唐・新羅連合に敗れ去り、百濟王家、遺臣は悲しくも父祖の地を捨て、同盟國日本國への移住を決意し、関西へ渡ることとなった。

唐は白村での日本・百濟戦大勝利の後、すぐに日本國へ大軍を派兵し、武力侵攻を謀ったのではない。朝鮮半島情勢がそれを許さなかった。高句麗と唐が戦っていたからである。唐は日本國と交渉をすべく、大使を派遣してきた。彼らは筑紫に駐屯していた。この時の日本國の朝廷は太宰府にあった。

大宰府の由縁は古代中国呉王朝の一族であった古代九州の覇者姫氏(「倭の五王」と呼ばれている)が中国南朝に臣従し、自らを中国王朝の太宰と位置付け、「府」を開いたことにある。大宰府は姫氏王朝の首都であった。

朝散大夫、郭務儂が「表函」を持って日本國へ乗り込んで来た。「海外國記」によると、この「表函」は唐の天子の書ではなかったと伝える。また、この使節団も天子が派遣したものではなく、百濟に居た鎮將劉仁願が派遣した私的な使節団だったようである。よって彼らは入京できなかった。京とは太宰府のことである。

日本國は白村の戦いに敗れたが、日本國天皇は健在である。百濟國のように、王が國を去り、高句麗に逃げて、國が滅びたわけではない。

唐が日本國にいかなる要求をしたか、明らかではない。日本書紀が親書の内容を記録しなかったのは、編者がその親書を手に入れることができなかったからであろう。日本國天皇家は日本國の独立を守るべく、唐との外交交渉に心血を注いだ。だが、唐との再戦を覚悟したと思われる。対馬、壱岐、筑紫國に「防(防人)」と「烽(すみ)」が置かれた。筑紫に水城が築かれた。交渉決裂の場合、唐は当然、日本國へ武力侵攻してくる。その時、唐の日本國侵攻ルートはどこか。防衛の為には何よりもまずそのルート確定が絶対となる。

そのルートはほぼ間違いなく確定できた。そのルートは隋の時代、その使節団が日本國天皇、上宮聖徳王の下にやってきたルートとほぼ同じであろう。唐が大船団を集結して日本國へ攻めてくると想定すれば、この海路である。日本國天皇は確信を持っていた。

このルートで唐の大船団を迎え撃つとすればどこか。当然、日本國天皇家は熟考を重ねたにちがいない。恐らく、百人が百人ともここだと指摘する場所がある。関門海峡である。瀬戸内海に抜けるにはこの隘路を通過しなければならない。関門海峡は狭く、潮の流れは東流し、西流し、複雑である。日本國天皇家はこの隘路で唐

船団迎え撃つことが出来れば勝機はある。多くの船は一度に通れない。火力で挟撃することができれば、白村の仇をとることができる。今度は唐・新羅の兵が関門海峡を血に染める番だ。

この認識は唐側にとっても同じだった。この隘路を確保しなければ日本國侵攻は成立しない。ここが最大の要所だ。唐対日本國の最終戦、ファイナルの帰趨はこの攻防によって決まる。



## 鍵を握る九州天皇家の天武

九州天皇家が初めて歴史の表舞台に躍り出た瞬間であった。それまで神武以来の九州天皇家は北九州の一隅を占めるだけの小國であった。中国史書に記録が残る日本の古代国家は呉の庶子「忌」によって建国された九州の姫氏倭國(「邪馬台國」「倭の五王」)と関西の大国、日本國(隋書)である。日本書紀が「磐井の乱」と記録しているのは、この両大国の激突だった。この戦いに勝利した日本國天皇家が九州を押さえ、日本列島を支配することになる。

しかし、唐侵攻が九州天皇家の運命を変えた。唐が侵攻してくる際に攻防の要路となる関門海峡を支配してきたのは九州天皇家である。イザナギ・イザナミの時代からこの隘路を支配してきた。現在、そこを支配するのは九州天皇家天武である。

日本國にとっても、唐占領司令官にとっても、天武がキーパーソンとなった。天武を巡る双方の交渉が始まる。日本國天皇天智は太宰府に居た。この会見の様子は日本書紀が天智・天武の会見として描写している。この会見は日本國天皇家と九州天皇家との会見だった。

天智は天武に尋ねた。「自分の跡を継いで唐と戦うか。」

果たして、天武はどう答えるか。天武の答えは意外なものであった。小倉南区の山、妙見山に入って日本國天皇の病氣平癒祈願をするという。日本國天皇天智は一瞬の間をおいて、「許す」と答えたように思われる。思いがけない答えだったのだろう。

天武は大唐と日本列島の支配国家日本國天皇家に挟まれて、そのどちらに味方すると明言することができなかった。今、明言することは破滅につながる。天武は「耳我嶺」に入り、情勢が熟するのを待った。やがて白村

敗戦以来、幾多の辛苦を重ねてきた日本國天皇天智は唐との外交交渉の結論を見ないまま亡くなった。その後を太政大臣大友王が受け継ぐことになる。

唐はこの好機を逃がさなかった。百済はすでに滅んだ。今こそ日本國を滅ぼすことができる。極東の大国、日本國天皇家を滅ぼすチャンスだ。この時、唐が練った戦略は、直接、唐軍による日本國侵攻ではなく、「内乱」であった。筑紫に駐屯していた唐は九州天皇家の天武と手を結んだのである。天武もついに唐を選択し、次のように宣言して、蜂起する。壬申の乱は、こうして勃発した。

今聞く。近江朝廷の臣等、朕が為に害はむことを謀る。是を以て、汝等三人、急に美濃國に往りて、安八磨郡の湯沐令多臣品治に告げて、機要を宣ひ示して、先ず當郡の兵を發せ。仍、國司等に経れて、諸軍を差し發して、急に不破道を塞げ。朕、今發路たむ。 (日本書紀天武上)

日本書紀二八卷天武上は蜂起の動機をこのように伝える。「近江朝廷」とは日本國天皇家朝廷である。日本國天皇家の太政大臣大友王が、日本國の天皇位を嗣ぐべき皇太子であったかどうか明らかではない。彼は太宰府の率であった蘇我赤兄等、日本國天皇家朝廷の主要メンバーと共に太宰府にいた。

天武の背後には大唐が控えていた。天武は思慮深く、情勢分析は的確で、用意は周到であった。日本列島の覇権国家であった日本國は白村の大敗によって、今や力に陰りが見える。日本國には有能な將軍も居なければ、兵も無い。しかも日本國天皇天智は死んだ。その後継はまだ決まっていなかった。天武は蜂起する。

蜂起は成功し、大友王は北九州の「山前」で首を括り、遺体は斬首された。ここに栄光の日本國天皇家は滅亡した。唐は東アジアの大国、百済、高句麗、日本國天皇家を滅ぼしてしまったことになる。その後、新羅が朝鮮半島を統一し、日本列島には九州天皇家が日本を統治し、天武は初代の天皇となった。壬申の乱の後、天武が太宰をして、耽羅の使節に言わしめた言葉がある。

天皇、新たに天下を平けて、初めて即位す。是に由りて、唯賀使を除きて、以外は召したまはず。即ち汝等の親ら見る所なり。亦時寒浪嶮し。久しく淹留めたらば、還りて汝が愁を為してむ。故疾く帰るべし。 (日本書紀天武下)

「新たに天下を平けて」とは日本國天皇家を倒したという意味である。「初めて即位す」とは、日本國天皇の位に即位したという意味である。つまり、ここで初めて天武は天皇となった。この天皇位を受けて、のちに神武以降に諡として天皇の称号が与えられることになる。

大陸との交通の要所である関門海峡を押さえた九州天皇家はこうして日本列島の覇者となった。これが最初である。のちに、再び、この海峡を押さえていた国家が日本列島の覇者となった。明治維新の長州である。

## 明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の御代 十市皇女挽歌

十市皇女薨りましし時、高市皇子尊の御作歌三首

- 156 三諸の 神の神杉 夢にだも見むとすれども 寝ねぬ夜ぞ多き  
157 三輪山の 山邊眞麻木綿 短木綿 かくのみ故に 長しと思いき  
158 山振の 立ち儀ひたる 山清水 酌みに行かめど 道の知らなく

十市皇女が急死したのは天武七年(678)四月七日である。亡くなった場所は「宮の中」と書いているだけだが「宮」とは天武が居た太宰府大極殿の宮中である。157番歌の「三輪山」は原文では「神山」と書かれている。「三輪」は「ミワ」であるが「ミワ」は「神」の訓である。従って「三輪山」とは「神山」と書かれているのである。

高市皇子は「神山」の山辺に生える眞麻、木綿は短い。でもあなたの寿命までもがこんなに短いとは思わなかったと哀れんでいる。十市皇女は天武と額田王の間に生まれた。その後、実母、額田王は天武の兄の近江天皇の妻となる。天武四年の二月、十市皇女は九州天皇家の伊勢神宮(行橋市)に参拝している。その短い一生を高市皇子は悲しんだ。

## 天武天皇挽歌

天皇崩りまし時の大后の御作歌一首

159 やすみしし わご大君の 夕されば 見し給ふらし 明ければ 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄葉を  
今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ 夕されば あや  
に悲しみ 明ければ うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

686年9月9日、天武が亡くなった。皇后持統の哀しみが山の紅葉がまだかと尋ねる天武の姿の思い出と共に詠われている。近江天皇の皇后の歌では捕鯨と淡海の海が共に詠われている。その歌とは対照的に天武皇后の歌では山が歌われている。近江天皇は淡海(小倉南区長野)の大津の宮で亡くなった。故に淡海の海が詠われた。持統が詠った「神岳」とはどの山をさすのか。通常「神岳」は明日香の雷の丘と読まれている。

神のいます岳の意味で、ここでは奈良県高市郡明日香村の雷岳。清御原の宮と近い。

(日本古典文学大系萬葉集159頭注)



持統の脳裏に去来する天武の姿は山の紅葉はまだかとしきりに尋ねる天武である。

あんなにご覧になりたいと思われていたのにその紅葉を見ることなく亡くなってしまわれた。もう一度神岳の美しい紅葉を見せてあげたかったわ。

持統の歌にはこのような心情がにじみ出ている。天武がそれほどまでに待ち望んだ紅葉の山が奈良明日香のこの雷丘であろうか。どうみても高さわずか20mほどの丘の紅葉を天武が待ちわびたとは思われない。奈良には紅葉の美しい山がたくさんある。かって近隣の小中学校が秋の遠足でよく行く紅葉の名所は談山神社である。誠に紅葉が美しい。奈良盆地を囲む山々の紅葉はどこも美しい。奈良に住む人の中に「雷」の紅葉を待ち望む人がいるであろうか。もし仮に本当に天武が死の直前まで「紅葉はどうだ。もう色づいたか」と待ち望んでいた神岳が「雷の丘」というのであれば、他にもっと素晴らしい紅葉の名所があったのにと天武が気の毒に思えてならない。

問題の根本は、天武が亡くなったのは奈良だと、誤解しているところにある。天武紀を論理的に読む限り、天武は太宰府にいたと読むしかない。朱鳥元年の記事をとりだしてみよう。

- ・朱鳥元年五月十四日に詔して、大官大寺に、七百戸を封して、税、三十萬束を納む。
- ・十七日に、宮人等に爵位を増し加ふ。
- ・二十四日に、天皇、始めて體不安れたまふ。因りて、川原寺にして、薬師経を説かしむ。宮中に安居せしむ。
- ・二十九日に、金智祥に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと各差あり。即筑紫より退りぬ。

天武が亡くなる四ヶ月前の五月の記事である。この月に大官大寺へ七百戸を封して、稲を三十萬束納めさせている。二十四日に天武の体は不調を訴え、川原寺で薬師経を読んでいる。その五日後の二十九日に筑紫で金智祥を饗している。筑紫とは博多である。博多の迎賓館「筑紫館」で新羅の客を饗応しているのであるから天武が二十四日に奈良に居たということは時間的に考えてあり得ない。天武はこれらの政務を奈良ではなく、太宰府で掌っていたのである。「宮中」とは太宰府大極殿である。そして川原寺もまた太宰府の寺である。九月九日に天武は崩御した。その場所は太宰府大極殿である。

天武は奈良で亡くなったと誤解されている。この誤解が「神岳は雷丘だ」という更なる誤解を生んでいる。天武が亡くなったのは奈良ではなく太宰府大極殿である。

「神岳」とは太宰府から見えた山である。では太宰府の周辺に神が祀られている山が存在するのか。しかも太宰府造営当時から神の山と崇められた霊峰が存在するか。太宰府は風水によって設計された超近代都市だった。風水では東北が鬼門である。鬼門から鬼や悪霊が侵入してくる。鬼門を護らなければならない。太宰府では鬼門に当たる所に宝満山(御笠山)がある。従って太宰府を造った古代王朝は宝満山に神社を創祠した。現在、山頂に竈門神社が祀られている。宝満山は太宰府の創建当時から、神の山であった。宝満山は太宰府の鬼門を護る神が存在した絶対の神山だった。

天武が、「神岳の紅葉はまだか」と、尋ねた神の山は宝満山である。686年9月9日に天武は亡くなった。まだ紅葉は早い。標高829mの宝満山が紅葉に染まるのはもう少し先だ。

天武は壬申の乱に勝利して太宰府を手に取りめた。ここで全国を統治した。太宰府を護っている鬼門の山、宝満山の神は今や私を護っている神だ。その神の山の美しい紅葉を見て死にたい。天武は最後にそのように願ったのであろうか。

一書に曰はく、天皇崩りまし時の太上天皇の御製歌二首

- 160 燃ゆる火も 取りて裏みて 袋には 入ると言はずや 面知らなくも  
161 北山に たなびく雲の 青雲の 星離り行き 月を離りて

北山にたなびく雲、青い雲が星を離れいき、月を離れていく。そのように天皇も私のそばを去っていかれた。北山とは原文は「向南山」である。「南を向く山」という表現は「天子は南面する」と同じである。「北山」とは太宰府の北を守る山、四王寺山である。

天皇崩りまし後八年九月九日、奉為の御齋會の夜、夢のうちに習ひ給ふ御歌一首

- 162 明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の國は 沖つ藻も 靡きし波に 潮気のみ 香れる國に 味こり あやにともしき 高照らす 日の皇子

天武は壬申の乱に勝利して明日香清御原で即位した。壬申の乱の拠点九州天皇家の伊勢國であった。その伊勢國は行橋市に存在した。天武が蜂起した時、「伊勢に逢え」と命令したことが日本書紀に残る。天武は伊勢に集結して蜂起しようと決めていたのである。この時、天武は彦島に存在した「嶋の宮」に居た。一族郎党を率い、九州天皇家の伊勢に向かって九州天皇家の美濃(小倉南区)、伊賀(荻田町)を通った。むろん伊勢には天照大神を祀った伊勢神宮があった。天武はこの有名な祖先神の加護によって勝利したと思ったのであ



ろう。天武が亡くなった後、持統が夢のなかで伊勢で輝いている天武を見たというのも当然なことである。この伊勢は九州天皇家の伊勢、行橋市である。



(<http://www.geocities.jp/chikusi117/houman.html>)

## 藤原宮に天の下知らしめしし天皇の御代 大津皇子挽歌

大津皇子薨りまし後、大来皇女伊勢の齋宮より京に上る時の御作歌二首

- 163 神風の 伊勢の國にも あらましを なにしか来けむ 君もあらなくに  
164 見まく欲り わがする君も あらなくに なにしか来けむ 馬疲るるに

大津皇子の名前は小倉南区長野に存在した古代の湊「近江大津」に由来する。大津皇子は686年10月25日に亡くなった。亡くなったことを聞き、姉の大来皇女が伊勢の齋宮より京に上って来たのは686年11月16日と言われる(頭注162-8)。死後すでに21日。いささか遅いと思われるが大来皇女はもう弟のいない京には行きたくなかったのであろう。彼女は「なにしか来けむ君もあらなくに」「なにしか来けむ馬疲るるに」と詠っている。

大津皇子の人となりは次のように伝えられている。大津が皇太子草壁を凌いでいたことは誰にもわかる。

状貌魁梧、器宇峻遠、幼年にして学を好み、博覧にしてよく文を属す。壮なるにおよびて武を愛し、多力にしてよく剣を撃つ。性すこぶる放蕩にして、法度に拘わらず、節を降して士を礼す。これによりて人多く付託す。  
(懐風藻)

大津皇子は存在を許されなかった。姉、大来皇女はそれがよく分かっていた。来るべき時が来て弟は殺された。もはや京に上ったところで何の意味があろうか。馬が疲れるだけだ。伊勢とは九州天皇家の伊勢、行橋市である。京とは太宰府である。行橋市から太宰府まで約58.5km、馬で約11時間ほどの距離である。疲れる、疲れるというほどの遠路ではない。だが弟のいない京への道は長い。大来皇女にとってはむなしいだけの道のりだった。

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首

- 165 うつそみの 人にあるわれや 明日よりは 二上山を 弟世とわが見む  
166 磯の上に 生ふる馬酔木を 手折らめど 見すべき君が 在りと言はなくに

大津皇子の屍が殯宮から葛城の二上山に移され埋葬された時は春であった。周防灘の波が寄せる磯の畔に白い小さな花をつけている馬酔木を切り取って見せようと思うが弟はもはやこの世にいない。誰も弟が生きているとは言ってくれない。弟は今日二上山(ふたかみやま)に埋葬された。明日からは二上山を弟と思って見よう。

大津皇子が埋葬された「二上山(ふたかみやま)」は奈良県葛城市加守と大阪府南河内郡太子町大字山田にまたがる二上山(にじょうざん)ではない。葛城の二上山とは九州天皇家の都があった田川市の山である。大来皇女は弟の罪の為、伊勢神宮の任を解かれ田川に呼び戻された。二上山はその住まいから見える山である。

## 日並皇子挽歌

日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

167 天地の 初めの時 ひさかたの 天の河原に 八百萬 萬神の 神集ひ 集ひ座して 神分り 分りし時に 天照らす 日女の尊 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の國を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神の命と 天雲の 八重かき別きて 神下し 座せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の 淨の宮に 神ながら 太敷きまして すめろきの 敷きます國と 天の原 岩戸を開き 神上り 上り座しぬ 我が王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴からむと 望月の 満しけむと 天の下 四方の人の 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか 由縁もなき 真弓の岡に 宮柱 太敷き座し 御殿を 高知りまして 朝ごとに 御言問はさぬ 日月の 数多くなりぬる そこゆえに 皇子の宮人 行方知らずも

天武は九州天皇家の中で初めて天皇となった。日本國天皇家を打ち倒して天皇の地位に就いた。草壁皇子は天武十年に皇太子となる。天武の跡を継ぐことを約束されていたが、689年4月13日に亡くなってしまう。

草壁の死によって九州天皇家の運命が大きく変わる。皇后、鸕野讃良は自ら皇位を継ぐことを決心して、690年、奈良に遷都、即位する。ここに新たに近畿天皇家が始まる。

人麿は草壁皇子が天照大御神からの系譜を受け継ぐ九州天皇家の正統の王者であると歌いはじめている。

「天の原 岩戸を開き 神上り 上り座しぬ 我が王 皇子の命の」……草壁皇子は亡くなったと人麿は歌った。草壁皇子の宮はどこにあったのか。

## 「島の宮」は奈良の「島の庄」ではない

草壁皇子の島の宮は通常、「奈良県高市郡明日香村島の庄」にあったとされる。有名な蘇我馬子の陵、石舞台古墳の西である。すぐ側を飛鳥川が流れている。島の庄の地名の由来は分からないが、その地形を見ても、ここが二つの川の中州にできた島とは見えない。例えば、大阪市の中之島は淀川の中州である。「中の島」という地名は地形と一致する。飛鳥の「島の庄」はそのような地形ではない。

167番人麿挽歌には宮の位置を特定できる歌詞はないが、幸い「皇子尊の宮の舎人ら働しば傷みて作る歌」が23首も掲載されている。その中に「島の宮」が歌われている。

174 外に見し 真弓の岡も 君座せば 常つ御門と 侍宿するかも

175 夢にだに 見ずありしものを おほほしく 宮出もするか さ絵の隈廻を

反歌二首

168 ひさかたの 天見るごとく 仰ぎ見し 皇子の御門の 荒れまく惜しも

169 あかねさす 日は照らせれど ぬばたまの 夜渡る月の 隠らく惜しも

或る本の歌一首

170 嶋の宮 まがりの池の 放ち鳥 人目に恋ひて 池に潜かず

皇子尊の宮の舎人ら働しば傷みて作る歌23首

171 高照らす 我が日の御子の 万代に 国知らさまし 嶋の宮はも

172 嶋の宮 上の池なる 放ち鳥 荒びな行きそ 君座さずとも

## 「橋の嶋」の宮

170番歌では草壁の宮を「嶋の宮」と歌っている。普通に考えれば嶋とは island の意味である。海上に浮かぶ嶋と考えなければならぬ。幸い舎人の歌の一つに島の名前が歌われていた。

179 橋の 嶋の宮には 飽かぬかも 佐田の岡辺に 侍宿しに行く

島の名前は「橋の島」である。「橋の島」は九州天皇家では有名な島である。最初に「橋」が登場するのは伊邪那岐命の説話である。「泉國」から逃げ帰った伊邪那岐命が「竺紫日向之橋阿波岐原」でミソギをする。その時、子どもが産まれた。伊邪那岐命が言った言葉の中に「橋」を特定するヒントがある。

イザナギ尊、既に還りて、乃ち追ひて悔いて曰はく、「吾前に不須也凶目き汚穢き處に到る。故、吾が身の濁穢(けがわらしきもの)を滌ひ去てむ」とのたまひて、則ち往きて筑紫の日向の小戸の橋の櫛原(あはきはら)に至りまして、祓ぎ除へたまふ。遂に身の所汚を盪滌(すす)ぎたまはむとして、乃ち與言して曰はく、「上瀬は是太だ疾し。下瀬は是太だ弱し」とのたまひて、便ち中瀬に濯ぎたまふ。

(日本書紀上第五段)

故、其の穢悪を濯ぎ除はむと欲して、乃ち往きて粟門及び速吸名門を見ず。然るに、此の二つの門、潮既に太だ急し。故、橋小門に還向りたまひて、拂ひ濯ぎたまふ。

(日本書紀上第五段)

この二つのイザナギ説話を正確に読み解いて見よう。

- (1) 「筑紫」とはイザナギ建国の「筑紫」である。この筑紫は現在の福岡県筑紫ではなく古代筑紫である。イザナギは企救半島と下関市をつなぐ渡しが存在した門司区の半島(岬)に筑紫國を建国した。
- (2) 「日向」とは日が向かう方向、つまり西をいう。「筑紫の日向」とは門司の西という意である。門司区の西に存在するのは彦島である。
- (3) 「小戸」とは彦島と本州との間の狭い海峡を言う。現在でも「小戸」と言われている。
- (4) その海峡は直角に曲がり「上瀬」、「中瀬」、「下瀬」と三つに別れる。
- (5) 櫛原(あはきはら)は阿波岐原と同じである。語幹は「アワ」である。「アワ」とは「粟門」とも書かれているが、本来の意味は「泡」である。「泡」とはこの海峡は海流が岸にぶつかって泡と散る様子から付けられた地名である。彦島小戸の姿である。
- (6) 速吸名門とは彦島小戸の巖流島側の湊である。
- (7) 橋小門(橋の小さな湊)とは粟門(あわの湊)と速吸名門(速吸の湊)の中間に存在した小さな湊である。

## 風土記伊豫國に「橋の嶋」の歌がある

伊豫國風土記に橋の島で歌った神功皇后の歌が有る。

風土記 逸文 伊豫國 神功皇后御歌

橋の 島にし居れば 河遠み 曝さで縫ひし 吾が下衣

(橋の島にるので、河が遠い。河の水にさらさないで下着を縫ってしまったよ。)

同じ歌が万葉集巻7・1315にあるが、こちらには作歌者名はない。「伊豫風土記」では神功皇后の歌と書かれている。この「橋の島」の歌が「伊豫風土記」に収められていることが場所特定の決め手となる。

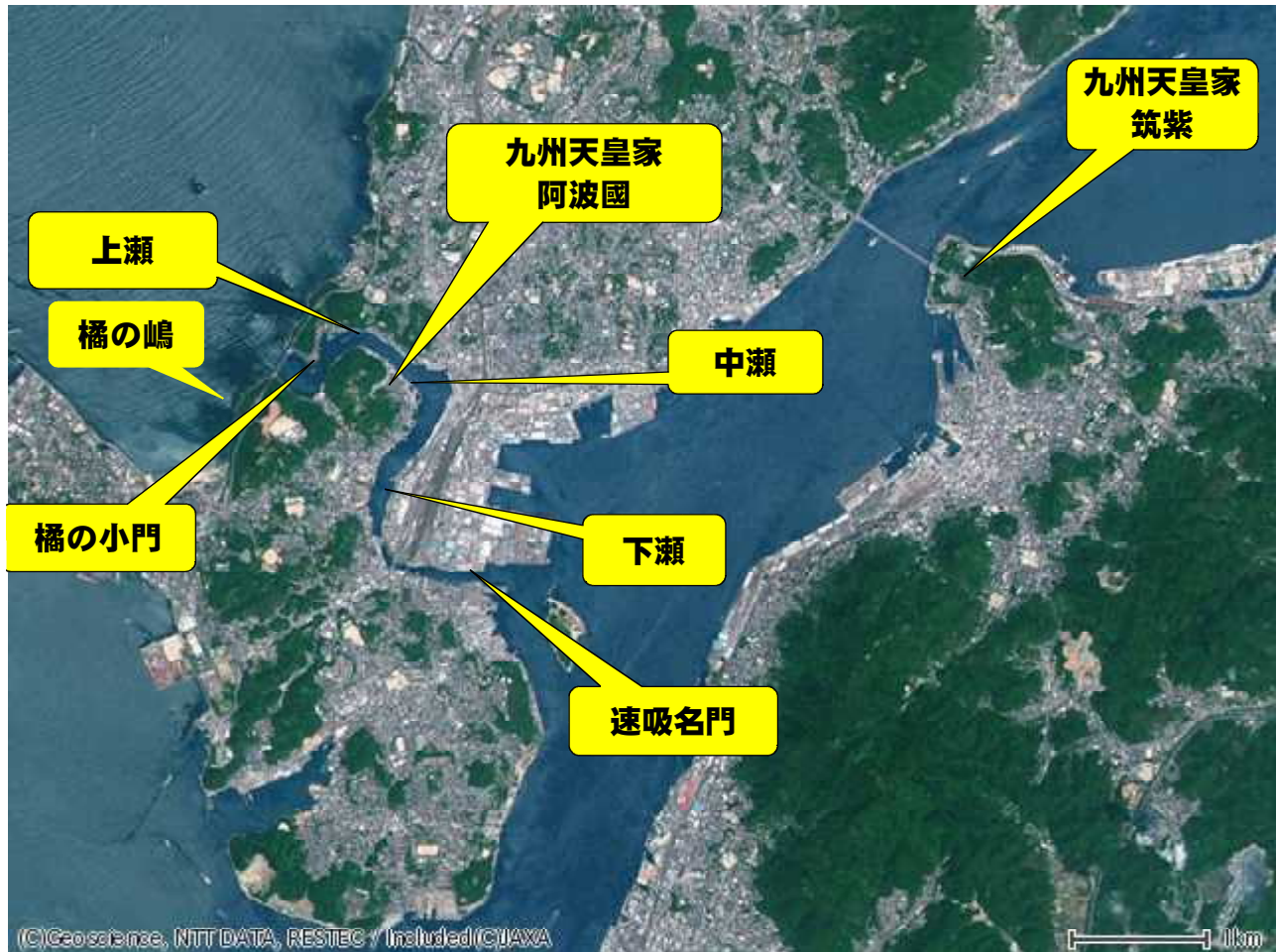
この「伊豫」とは愛媛県伊予ではない。風土記伊豫國の伊豫國はイザナギ・イザナミ建国の伊豫國である。イザナギ・イザナミは「伊豫二名島」に「伊豫」「阿波」「讃岐」「土佐」の四つの小さな弥生国家を統合した。風土記の伊豫國とはその伊豫である。また「阿波」はイザナギがみそぎをした「櫛原(あはきはら)」または「阿波岐原」と同じである。伊豫二名島とは現在の彦島老町である。

「私は橋の島にるので川が遠い」と、神功皇后が歌った橋の島とは、九州天皇家の伊豫國の「橋の嶋」である。草壁皇子の舎人が歌った「橋の嶋の宮」は、神功皇后の歌に登場する「橋の嶋」と同じである。

九州天皇家の伊豫國とは彦島老町である。では、「橋の嶋」とはどの嶋か。「橋」とは本来は、「立ち鼻」の意である。彦島で人間の鼻の形をした島があるか。「橋の島」とは「老の山公園」である。まさに、人間の横顔の鼻の姿をしている。もちろん、現在は嶋ではないが、その形状はまさしく人の鼻である。

「老の山公園」が古来、「橘の嶋」と呼ばれてきた島である。ここには確かに近くに川がない。歌の通りである。神功は「彦島・老の山」でこの歌を詠った。しかし、神功はここに旅して来たという訳ではない。「橘の嶋」は天照大神の「高天原」が存在した九州天皇家の聖地であった。ここには九州天皇家伝統の宮があった。天照大神も神功もその宮に居た。草壁皇子の「島の宮」もここにあった。草壁皇子は九州天皇家伝統の「橘の宮」で亡くなったのである。

草壁皇子の死は九州天皇家にとって衝撃であった。九州天皇家の未来は天武と持統のただ一人の皇子、草壁に託されていた。その草壁が亡くなった。九州天皇家の運命は大きく変わることになる。万葉編者は九州天皇家鎮魂のため万葉集を編纂した。草壁皇子の死が九州天皇家にとっていかに大きな事件だったか、万葉編者は、異例に、舎人の切ない思いを詠った歌を二十三首も掲載した。



## 潮の香いかする舎人の歌

173 高照らす 我が日の御子の いましせば 島の御門は 荒れずあらましを  
 176 天地と ともに終へむと 思ひつつ 仕へまつりし 心違ひぬ  
 177 朝日照る 佐田の岡辺に 群れ居つつ 我が泣く涙 やむ時もなし  
 178 み立たしの 島を見る時 にはたづみ 流るる涙 止めぞかねつる  
 180 み立たしの 島をも家と 棲む鳥も 荒びな行きそ 年かはるまで  
 181 み立たしの 島の荒磯を 今見れば 生ひざりし草 生ひにけるかも  
 182 鳥座立て 飼ひし雁の子 巢立ちなば 真弓の岡に 飛び帰り来ね  
 183 我が御門 千代とことばに 栄えむと 思ひてありし 我れし悲しも  
 184 東の たぎの御門に 侍へど 昨日も今日も 召す言もなし  
 185 水伝ふ 磯の浦廻の 岩つつじ 茂く咲く道を またも見むかも  
 186 一日には 千たび参りし 東の 大き御門を 入りかてぬかも  
 187 つれもなき 佐田の岡辺に 帰り居ば 島の御階に 誰れか住まはむ

188 朝ぐもり 日の入り行けば み立たしの 島に下り居て 嘆きつるかも  
189 朝日照る 嶋の御門に おほほしく 人音もせねば まうら悲しも  
190 真木柱 太き心は ありしかど この我が心 鎮めかねつも  
191 けころもを 時かたまけて 出でまし 宇陀の大野は 思ほえむかも  
192 朝日照る 佐田の岡辺に 泣く鳥の 夜哭きかへらふ この年ころを

## 「はたこ」は機子

193 はたこらが 夜昼と言はず 行く路を われはことごと 宮道にぞする

「はたこ」とは「機子」であろう。彼女らは布を織っていた。天皇家が着る衣の布は天皇家によって織られていたのは当然である。その職工を詠った歌が193番であろう。機子たちは昼夜を問わず布を織っていた様子である。「畠子(頭注)」という理解は意味をなさない。農夫は夜は仕事をしない。神功皇后は「曝さで縫ひし吾が下衣」と詠ったが、その布を織ったのが「はたこ」という訳である。

## 「宇陀の大野」は小倉南区・長野

191 けころもを 春冬設けて 幸しし 宇陀の大野は 思ほえむかも

歌に「宇陀の大野」が詠われている。この「宇陀」は神武記に登場する。神武が進入したのは小倉南区で、そこは熊襲の長官が支配する行政区だった。「宇陀」もその一つで、現在の小倉南区・長野である。長野を流れる川が大野川である。この川の名前に、「大野」が残る。「宇陀の大野」は小倉南区・長野である。ここには大津宮が存在した。191番歌は草壁皇子が九州天皇家近江大津宮から狩に出かけていたことを詠ったものである。

草壁皇子が亡くなったことは持統の生き方に大きな変化を与えた。持統に奈良藤原京に帰ることを決意させ、690年、藤原京大極殿で即位する。ここに近畿天皇家が始まる。

## 忍坂部皇子挽歌

柿本人麿、泊瀬部皇女忍坂部皇子に獻る歌一首 194

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り  
靡合ひし 孀の命の たたなづく 柔膚すらを 劍刀 身に副へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るら  
む そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふやと思ひて 玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち  
夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君ゆえ

右、或る本に曰はく、河島皇子を越智野に葬る時、泊瀬部皇女に獻る歌そといへり。日本紀に曰はく、朱鳥五年辛卯秋九月己巳の朔の丁丑、浄大參皇子川島崩りましぬといへり。

川島皇子への挽歌と云われている。川島皇子は持統即位の翌年、691年10月6日に亡くなった。人麿がこの歌を献上した泊瀬部皇女とは川島皇子の妻である。忍坂部皇子とは天武の第九子で、川島皇子と兄弟で、705年5月8日没。

この歌には飛鳥川と越智野が詠い込まれている。どちらも現在は奈良の地名であるが、「飛鳥」は天武の宮の名前、「飛鳥浄御原宮」が示すように、九州天皇家の都、田川市に存在した地名である。「越智野」も天武紀に登場する。

天武8年3月7日に、天皇、越智に幸して、後岡本天皇陵を拝みたてまつりたまふ。9日に、吉備太宰石川王、病して吉備に薨せぬ。天皇、聞しめして大きに哀びたまふ。(天武紀下)

天武はこの時太宰府に居た。太宰府から「越智」の後岡本天皇陵に参拝した記事である。後岡本天皇は天武の母と言われる。これらの地名が歌われているこの挽歌は九州天皇家で歌われた歌である。人麿は691年に太宰府にいたことになる。

## 明日香皇女挽歌

明日香皇女の城上の殯宮の時 柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

196 飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡し 下つ瀬に 打橋渡す 石橋に 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るれば生ゆる 何しかも わご王の 立たせば 玉藻の ところ 臥やせば 川藻の 如く 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや うつそみと 思ひし時に 春べは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 敷栲の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほしし 君と時々 出でまして 遊び給ひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定め給ひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れかも あやに悲しみ ぬえ鳥の 片戀 嬬 朝鳥の 通はす君が 夏草の 思ひ萎えて 夕星の か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば 慰もる 情もあらず そこ故に せむすべ知れや 音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名に懸かせる 明日香河 萬代までに 愛しきやし わご王の 形見かここを

文武天皇元年は697年である。文武が即位して三年後、人麿は明日香皇女の挽歌を詠んでいる。人麿と明日香皇女の間にとどのようなつながりがあったかわからない。この挽歌から歌詞の美しさ伝わってくるが哀惜の心はあまり伝わってこない。

### 大意

明日香河の上流の瀬には石橋を渡し、下流の瀬には打橋を渡してある。その石橋に伸びなびいている玉藻も、切れれば新しく伸びてくる。打橋に伸び繁っている川藻も、枯れると新しく芽を出してくる。なのに何故、わが皇女は、お立ちになれば玉藻のように、お臥しになれば川藻のように互いになびき合った、立派な背の君の朝宮をお忘れになるであろうか。夕宮をお背きになるのであろうか。この世の人であった時、春には花を折りかざし、秋になれば黄葉をかざし、袖をつらねて、鏡のように見ても飽きることなく、満月のように、いよいよ見たく讚うべく思っておられた背の君と、時々お出ましになってお遊びになった城上の宮を、今は、永久の宮とお定めになって、お逢いになることも言葉を交わされることも絶えてしまった。そのためか、何とも言えず悲しく思っ、片恋いに苦しむ背の君、朝鳥のようにお通いになる背の君が悲しみにしおれて、夕鳥のようにあちらに行きこちらに来て、心も静まらずにおられるのを見ると、自分の心をどう慰めてよいか分からないことだ。それ故、どうするすべも知らないが、せめてその音だけでも名だけでも、絶えず、天地のように遠く長くお偲びして行きたいと思う。なつかしい明日香河という御名を負っている明日香河を、万代までも。あわれ、ここは、追慕の念に耐えないわが皇女の形見の所である。

(日本文学大系萬葉集一頭注196)

## 高市皇子挽歌

高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

199 かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに長き 明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門をかしこくも 定めたまひて 神さぶと 磐隠ります やすみしし わご大君の きこしめす 背面の國の 真木立つ 不破山越えて 高麗劍 和暫が原の 行宮に 天降り座して 天の下 治め給ひ 食す国を 定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと服従はぬ 國を治めと 皇子ながら 任し給へば 大御身に 大刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を あどひたまひ 斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きおの 恐く 引き放つ 矢の 繁けく 大雪の 乱れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の あらそふ間に 渡会の 斎きの宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて 定めてし 瑞穂の國を 神ながら 太敷きまして やすみしし わご大君の 天の下 申したまへば 萬代に 然しも あらむと 木綿花の 栄ゆる時に わご大君 皇子の御門を 神宮に 装ひまつりて 使はしし 御門の人も 白栲の 麻衣着 埴安の 御門の原に 茜さす 日のことごと 鹿じもの い匍ひ伏しつ つぬばたまの 夕になれば 大殿を ふり放け見つつ 鶉なす い匍ひ廻り 侍へど 侍ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆きも いまだ過ぎぬに 憶ひも いまだ尽きねば 言さへく 百濟の原ゆ 神葬り 葬りいまして 麻裳よし 城上の宮を 常宮と 高くまつりて 神ながら 鎮まりましぬ 然れども わご大君の 萬代と 思ほしめして

作らし 香具山の宮 萬代に 過ぎむと思へや 天の如 振り放け見つつ 玉櫛 かけて 偲はむ 恐かれども

#### 短歌二首

200 ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らず恋ひわたるかも

201 埴安の池の堤の隠り沼のゆくへを知らに舎人は惑ふ

#### 或る書の反歌一首

202 哭沢の神社に三輪据ゑ祈れども我が大君は高日知らしぬ

万葉集最大の挽歌である。高市皇子。母は胸形徳善の娘尼子娘、草壁皇子の死後太政大臣となり、696年7月10日、明日香で亡くなった。高市皇子といえは壬申の乱である。

既にして天皇、高市皇子に謂りて曰はく、「其れ近江朝には左右大臣、及び智謀き群臣、共に議を定む。今朕に共に事を計る者無し。唯幼小少き孺子有るのみ。奈之何かせむ」とのたまふ。皇子、臂を攘りて劍を按りて奏言さく、「近江の群臣、多なりと雖も、何ぞ敢へて天皇の靈に逆はむや。天皇独りのみましますと雖も、臣高市、神祇之靈に頼り、天皇之命を請けて、諸將を引率て征討たむ。豈距くこと有らむや」とまうす。爰に天皇誉めて手を携りて背を撫でて曰はく、「慎め、不可怠」とのたまふ。因りて鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまふ。  
(日本書紀天武上)

蜂起はしたが、天武天皇の周りには優れた武人も行政官もない。当時、左右大臣を中心とした行政府を確立させていた国家は日本國だった。天武の國は皇親政治と云われた天皇中心の政權で行政組織は確立していなかった。

天武天皇の不安に対して答えることが出来たのが高市皇子だった。高市皇子もまだ若かったと思われるが、天武は軍事権の全てを高市に授ける。高市皇子は大功をたてた。人麿が高市皇子への挽歌で壬申の乱の活躍を歌い込んだのは当然であろう。しかし人麿挽歌には日本書紀が伝えない壬申の乱の真実が詠われている。

## 壬申の乱は日本國天皇家と九州天皇家の戦い

吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと 服従はぬ 國を治めと

天武は一体誰と戦ったのか。壬申の乱は古代国家間の戦いだった。当時日本列島を支配統治していた藤原京を首都とする日本國天皇家と小倉北区・小倉南区・苅田・行橋・香春・田川・下関市彦島を統治していた九州天皇家との戦いであった。

では人麿はこの乱をどのように認識していたのか。人麿の認識は「服従(まつろ)はぬ 國を治め」である。人麿はその相手を「國」=国家と認識していた。この認識は人麿個人の認識ではなく九州天皇家の認識だったと考えるべきであろう。

## 壬申戦の実相

時に大友皇子及び群臣等、共に橋の西に営りて、大きに陣を成せり。其の後見えず。旗幟野を隠し、埃塵天に連なる。鉦鼓の聲、数十里に聞ゆ。列弩乱れ發ちて、矢の下ること雨の如し。(天武紀上)

壬申の乱に於ける大友王側の陣容である。大友陣はその最後が見えないほど多数の兵がつめ、旗は野を隠し、埃は天に舞い上がり、鉦鼓の音は数十里に聞こえる。一体どれほどの軍勢か。

ここを読むと大友王軍は何万という将兵が陣取っているように思える。しかしその後の瀬田の橋の攻防シーンとの間には落差がありすぎる。最期の攻防は瀬田橋の一枚の長板である。橋板を取りはずし、渡れなくしていた橋には一枚の長板を渡していた。一枚の板は一人しか歩けない。渡ろうとすると矢を射て渡れなくする。この時、甲を重ね着た天武方の武将大分君稚臣が矢を受けながらも一枚の長板を渡り、大友陣に討ち入る。すると大友陣はなだれをうって崩れた。大友軍の先頭を守っていたのは「智尊」という人物である。およそ武人らしからぬ名前の人物一人が守っていただけで他の武将の姿は見えない。戦いもやはこれまでと逃げる味方の兵を智

尊が切って兵を押しとどめようとしたが大友軍の兵は逃げてしまった。

大きに陣を成せり。其の後見えず。旗幟野を隠し、埃塵天に連なる。鉦鼓の聲、数十里に聞ゆ。列弩乱れ發ちて、矢の下ること雨の如し。

この軍勢はどこに消えてしまったのか。実はこの軍勢は幻の軍勢であった。日本書紀編者が「後漢書光武帝紀」を引用して挿入した文飾に過ぎなかった。後漢書にはそのままの文がある。

<後漢書光武帝紀>

軍陳數百里不見其後 旗幟蔽野埃塵連天 鉦鼓之聲聞數十里 列弩亂發矢下如雨

大友陣の実景と思われた日本書紀のこの記述は大友陣とは関係なく、後漢光武帝軍の実景描写であった。実際の太友陣には兵はほとんど残っていなかったのである。

## 人唐挽歌に詠われた真実

日本書紀は壬申の戦闘の実相は書かれていない。実相と思われたのは中国史書を単に挿入しただけのものであった。壬申戦の実相を詠ったのが人唐である。この歌は私たちの常識を超える。

齊ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく

天武の将兵は「鼓」と「小角」と「幡」を持っていた。珍しく比喩が多い歌詞である。

- (1) 一斉に叩く鼓は雷の音と聞こえる。
- (2) 吹き響く小角の音は虎が吼えているかのようで人は皆おびえる。
- (3) 手に持つ幡は春の野焼きで風にあおられて燃える火のようである。

壬申の乱における天武の軍隊は一斉に鼓を叩き、虎がほえているのかと聞こえるほど多くの小角を吹き鳴らし、野火のように赤々と燃えるように赤い赤旗を翻していた軍隊であった。701年大宝軍防令には一つの軍隊に大角2つ小角4つを備えたと頭注は解説する。大宝律令は672年壬申の29年後の制定であるから天武軍は大宝軍防令に基づいて装備してたのではない。天武軍が所持していた小角は大宝軍防令に決められた大角2つ小角4つのような少ない数ではない。日本書紀天武14年11月に次の詔勅がある。

丙午に、四方の國に詔して曰はく、「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の類は、私の家に存くべからず。咸に、郡家に収めよ」とのたまふ。 (日本書紀天武14年11月)

天武天皇家では少なくともそれぞれの家に大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛があった。これらの装備武器は壬申の乱で使用されたものだった。壬申の乱においては天武軍の将はそれぞれに大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛を持っていた。それぞれの将は鼓を叩き、大角小角を吹き鳴らし、赤旗を靡かせていた。これが壬申の乱における天武軍であった。

「鼓」「大角」「小角」とはどのようなものだったのか。実物はどこにも残っていないし、具体的な記録もない。手ごかりは日本にはない。「鼓」「少角」は唐軍の記録の中にある。

朔方から数十里のところ、突厥の兵が集まってくると、唐軍の本隊は後退し、薛万均の兄弟は突厥軍に横撃を加えて、これを撃破した。突厥軍が逃亡すると、唐軍は梁師都を包圍した。諸将は城が堅固で下すことができないと見ていたところ、薛万均は「城中の士気は地に落ちており、鼓の音さえ聞こえません。落城の兆しです」と言った。はたして敵は梁師都を斬って降伏してきた。薛万均は功績により左屯衛將軍に任ぜられた。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%96%9B%E4%B8%87%E5%9D%87>)



唐と突厥との戦いに描写である。唐軍の将薛万均は城の中の鼓の音が聞こえないので士気を落していると判断した場面である。

堅く守り続ける高句麗の城を攻めあぐんでいた唐軍は、兵力差を活かすことが出来る力攻めを、機械の手を借りて増加させる好機を迎えたと言うべきかも知れなかった。遼河と鴨緑江間の大きな城の三つの内、二つまでは陥落させたのだが、最後の一つである「安市城」は堅牢無比で鳴らしていただけに、数ヶ月の籠城にも怯むことなく戦意は盛んであったのだから、なお機会を利用しないでは置けなかったのだといえるだろう。寒さに凍えているよりも、攻城戦に向かうという熱さを欲したかと思うばかりの唐軍の勢いは城壁の間際まで押し寄せ、迫った。今度こそという意気込みは兵士達の喊声(かんせい)と、突撃の合図の鼓や鐘や少角とが城を揺るがせる程の激しさを思わせた。

<http://blog.goo.ne.jp/basirain/e/ee847cdf0cbf5043be0461cc1d89e1af>

これは高句麗落城の描写である。此処に合図の鼓と少角が書かれている。高句麗の堅城安市城に迫った東軍は鼓や鐘を打ち少角を吹き鳴らした。

靺鞨(まつかつ、拼音: Mòhé)は、中国の隋唐時代に中国東北部(現在のロシア連邦・沿海地方)に存在した遊牧狩猟民族。突地稽は右衛將軍に拝され、唐の国姓である李氏を賜った。突地稽が死ぬと、子の謹行が後を継いだ。麟徳中(664年 - 665年)、謹行は營州都督となる。その部落は数千人にのぼり、財力もあつたことから夷人たちに憚られるようになる。のちに謹行は右領軍大將軍を拝命、積石道経略大使となる。吐蕃の論欽陵らが10万を率いて湟中に入寇して来た時、謹行の兵士は準備をしていなかったが、吐蕃軍が来るのを聞くと、旗を建てて鼓を打ち鳴らし、開門してこれを待った。すると、吐蕃軍は伏兵があると思つてそれ以上進めなかった。上元3年(676年)、謹行は吐蕃軍数万を青海で破つたため、鎮軍大將軍・行右衛大將軍を拝命し、燕国公に封ぜられる。

(<http://jiten.tnc.ne.jp/search.php?keyword=%E9%9D%BA%E9%9E%A8>)

靺鞨の突地稽は右衛將軍に拝され、唐の国姓である李氏を賜った。その子謹行の時、吐蕃の論欽陵が攻めてきた。謹行は旗を立てて鼓を打ち鳴らし、門を開けたままで敵を待っていた。

## 「鼓」

<http://blog.goo.ne.jp/wj-aki/e/5b1de81cc952590c6006c5bdac707...>



これらは唐軍の戦闘描写である。唐軍は鼓、鐘、少角、旗を装備していた。鼓と軍鼓とは区別されていると思われる。軍鼓とは全軍の進軍、退却などの指揮に使われた大きな太鼓であろう。だから戦場ではこの大太鼓は一つだけ使われたと思われ。鼓は実際はどんな形をしていたのかよく分からない。日本のいわゆる鼓(つづみ)とは異なる。あまり大きな太鼓では持ち運びに不便で、またあまり小さすぎても音が高すぎる。唐軍の各兵が持っていた鼓はちょうど腰に着けるぐらいの大きさだったのではないだろうか。

現在沖縄エイサーで使われている大太鼓は肩からひもで腰にぶら下げて叩く。唐軍が打ち鳴らした鼓とは沖縄エイサー太鼓が最も近いのではないだろう。上の中国のお祭りの写真では太鼓と鉦が使われている。鼓は肩からかけて撥で打っている。人麿は「斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで」と詠っているので太鼓は一斉に叩いたと思

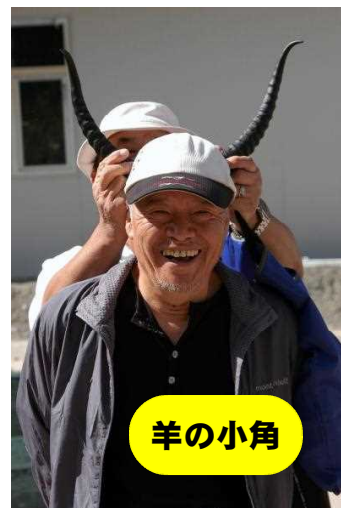
われる。誇張があったとしても劇場やコンサートホールとちがい屋外で雷の音ときこえるには太鼓の数は100や200はあったであろう。

## 「小角」

「小角」と「少角」は同じである。「小角」とは何でしょう。吹奏楽器であるがどのようなものだったのでしょうか。「角」という漢字からやはり「角(つの)」で作られたものと思われる。何の角であろう。たくさん手に入るとすればそれは羊である。中国のHPで見ると「小角」は観光客に売られている。

「大角」は大きな角で作られた角笛、「小角」は羊の小さな角で作られた角笛だったのであろう。人麿は虎が吼えるようだと言っている。この数もまた100や200でなかったであろう。

<http://4travel.jp/overseas/area/asia/china-xinjiangweiwuerzu>



## 「弩」

取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の あらそふ間に

取り持っている弓弭の鳴り響くさまは、雪の降る冬の林につむじ風が吹き巻いて押しわたって行くのかと思うほど聞くも恐ろしく、引き放つ矢の繁く多いことは大雪の乱れ降るようで、従わずに立ち向かった敵軍も、死ぬなら死ぬと命をかけて争うその時に (頭注199)

人麿の歌としては珍しく比喻が多い。戦に使われた武器の一つが弓である。この弓はいわゆる和弓と異なる。この弓のことは天武が14年に武器もまた私家に置かず郡家に収めろと命令している中に出る。

丙午に、四方の國に詔して曰はく、「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の類は、私の家に存くべからず。威に、郡家に収めよ」とのたまふ。

(日本書紀天武14年11月)

天武詔勅の中では「弩・抛」と書かれている。弩は弓のことであるが、この弓は先ほどの光武帝紀の記録に出る。

後漢書・光武帝紀

軍陳數百里不見其後 旗幟蔽野埃塵 連天鉦鼓之聲聞數十里  
列弩亂發矢下如雨

天武軍の武器であった「弩」は光武帝の軍が使っていた「弩」と同じで中国の伝統的な弓だった。天武が詔勅で郡家に収めよと命令した「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の類」は壬申の乱で使ったものである。人麿の高市挽歌と一致する。これらの武器、装備は唐軍のものだった。天武の将兵自らの武器ではなかった。故にそれぞれの将の家に置かず、郡家に収めよと命令したのであろう。

天武の兵は中国伝統の武器「弩」を使っていた。上の画像は明代のものである。この弓が「弩」に近いのではないだろうか。



## 筑紫に駐屯していた唐軍

斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆる までに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放

## つ 矢の繁けく 大雪の 乱れて来れ

人麿がこのように詠った天武軍の装備は記録に残る唐軍の装備と同じである。兵が持っていた弓は「弩」と天武詔勅に記録された弩である。壬申戦において天武軍は雷鳴と聞こえるばかりに鼓を叩き、虎が吼えているのかと人が怯えるまでに「小角」を吹き鳴らし、赤旗を翻し、弩の弦の音は冬の林を吹き荒れる旋風の如く、矢は大雪が降り乱れるかのように降り注いだ。

天武はこのような装備をどこから手に入れたのであろうか。「小角」「大角」など羊の角は当時の日本にはない。「弩」は即製できない。ではどこから手に入れたか。唐軍であろう。唐は664年以降6回大使を派遣している。

### 662年白村江敗戦

- 第一回 664年5月17日百済の鎮将劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。  
10月1日に、郭務悰等を發て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。10月4日に、郭務悰等に饗賜ふ。12月12日郭務悰等罷り帰りぬ。
- 第二回 665年9月23日、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等を遣す。等といふは、右戎衛郎将上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に對馬に至る。9月20日に、筑紫に至る。22日に表函を進る。10月の11日に、大きに菟道に闕す。11月の13日に劉德高等に饗賜ふ。12月14日に、物を劉德高等に賜ふ。この月に、劉德高等罷り帰りぬ。是歳、小錦守君大石等を大唐に遣す。

第三回 665年送唐客使劉德高を送る。唐使法聰来日。

667年3月19日都を近江に遷す。

第四回 11月9日に、百済の鎮将劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。13日に、司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。

### 668年高句麗滅亡

第五回 669年12月又大唐、郭務悰等2千余人を遣せり。671年春正月13日に、百済の鎮将劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。7月11日、唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り帰りぬ。

第六回 11月10日、對馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝婆・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰はく、今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭(とよ)みて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍に来朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。

671年12月3日日本國王近江宮に崩りましぬ。

672年3月18日、内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣して、天皇の喪を郭務悰に告げしむ。是に、郭務悰等、咸に喪服を着て、三遍挙哀る。東に向ひて稽首(おが)む。21日、郭務悰等、再拝みて、書函と信物とを進る。5月30日、郭務悰等、罷り帰りぬ。

671年に日本國天皇天智が滋賀県近江で亡くなる。この報せを672年筑紫に居た郭務悰に知らせたのは天武である。近江朝ではない。そして672年3月21日に郭務悰が再拝みて書函と信物を進った相手は天武である。日本國の天皇の死の直後、天武と唐郭務悰は急接近して密かに同盟を結んだ。こうして天武は唐軍から軍備を手に入れたのである。

## 壬申の戦は天武・唐同盟対日本國

671年12月3日に日本國天皇が崩御した。天皇が亡くなった宮は「近江宮」である。この「近江宮」と九州天皇家の「近江大津宮」ではない。日本國天皇家の「近江」、琵琶湖の「近江宮」である。

天武はこの時を待って蜂起した。蜂起の時、天武は自軍を唐軍の「鼓」「小角」「弩」で武装させていた。天武軍と唐軍は一体化していた。日本國の將兵はまるで唐軍と戦っていると錯覚したことであろう。人麿はこの真実を詠っている。日本古典文学大系「日本書紀天武上」の頭注に調連淡海・安斗宿禰智徳の日記が紹介されている。この日記には天武と唐人との会談の様子が記されている。

既而天皇問唐人等曰。汝國數戰國也。必知戰術。今如何矣。一人進奏言。厥唐國先遣觀者以令視地形險平及消息。方出師。或夜襲。或昼擊。但不知深術。時天皇謂親王云々

親王とは高市皇子である。天武はこの時唐軍から戦法を聞き出している。

- (1) 斥候を出して地形が平らか険しいか観察する。
- (2) 相手の消息をさぐる。
- (3) それから軍を繰り出す。
- (4) ある時は夜襲する。
- (5) ある時は昼攻撃する。
- (6) 深い戦術は知らない。

唐人の答えは、至極当たり前のことである。天武と唐人は、ただ戦術を尋ねるだけの関係だったとこの日記を読む訳にはいかない。天武には戦闘の経験は全くなかった。其れまで唐と戦ってきたのは日本國天皇家であった。天武側には戦いの経験者がいなかった。その事情は、蜂起を決意した時、「安八磨郡の湯沐令多臣品治に告げて兵を起こせ」と、命令していることで推察できる。「湯沐令」とは「課税の収納を行う役人」である(頭注)。いわば、税務署の役人に蜂起せよと命令したのだから、天武には、いざ蜂起、と言っても、兵も将もいなかった。

だが、天武は唐大使と深く結びついていた。この同盟があったからこそ、天武は蜂起を決断できたのである。天武は皇子の中で、宗像地方の豪族出身の母を持つ高市皇子を指揮官に就け、唐軍との共闘によって日本國天皇家に勝利した。唐軍が駐屯していた筑紫から天武の都、田川までわずか40kmである。壬申の乱は九州天皇家天武と唐との軍事同盟による日本國天皇家への反乱であった。

壬申の乱は天武単独の乱ではない。国内だけの視点から見ると、乱の本質は見えない。天武は唐と深く手を結んでいた。この事情は明治維新とよく似ている。長州は藩兵の近代化をめざし、ウエスト・リチャード銃、別名リシャール銃ともレカルツとも呼ばれている最新銃を装備した。これらの銃は、スコットランド出身の商人トーマス・ブレイク・グラバー商社から買ったものだった。明治維新の薩摩長州は武器をイギリスから買って、近代的な軍隊を編成し、幕府に勝利して新しい政府を作った。しかし、彼らが手に入れたのは武器ではなかった。彼らは当時の世界で最も先進国であったイギリスから、国家理念や行政制度も手に入れて、新国家を建設したのである。

天武の時代、唐は世界最大の国家で、その軍備も世界最強であった。軍事的だけではなく、国家形態においても当時の世界の中で最も進んだ国家であった。その唐との戦いに敗れた日本國の太政大臣大友王は壬申の乱で、再び、唐の軍備をした天武と戦わなければならなかった。天武の軍は当時の日本で真っ先に近代化に成功した軍隊であった。鼓を打ち鳴らし、小角を吹き鳴らし、自らを鼓舞し、相手を威嚇した。赤旗を翻し、扱いやすく命中率の高い近代兵器、「弩・抛」で雪が降るかのように矢を放った。天武軍は短期間で日本最強の軍隊となっていた。

しかも、天武は唐から武器だけを買ったのではなかった。天武は新しい国家理念、行政制度もまた唐から手に入れた。それが天武がめざした律令国家であった。

壬申の乱は革命ともいえる大変革であった。この革命は唐から全てを学び達成された。明治維新も革命であった。この革命はイギリスから全てを学び達成された。日本史上、古代と近代の二度の大変革はいずれも当時の世界最先進国家と結んだ日本国内の反中央勢力によって成し遂げられた。その勢力は奇しくも関門海峡を押さえていた小国家であった。

## 人唐の軽の妻挽歌

柿本朝臣人唐、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首

207 天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かざる 岩垣淵の 隠りのみ 戀ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 音に聞きて 言はむ術 為むすべ知らに 音のみを 聞きて

あり得ねば 我が戀ふる 千重の一重も 慰もる 情もありやと 吾妹子が やまず出で見し 輕の市に 我が立ち聞けば 玉たすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉梓の 道行く人も ひとりだに 似てし 行かねば すべをなみ 妹が名呼びて 袖ぞ振りつる

大意 輕の路は吾妹子の里であるから、よくよく見たいと思うけれど、いつも行ったら人目が多いので目につくし、しばしば行ったらきっと人が知るだろうからうるさいし、まあまあ後になってでも逢おうと、大船のように頼みにして、心の中でのみ恋しく思いつづけていたのに、空を渡る日が暮れて行くように、照る月が雲隠れてしまうように、靡き寄った妹は、亡くなってしまったと、使いの者が来て言うので、それを聞いて何と言ってよいのやら、どうしてよいのやら分からず、報せだけを聞いてじっとしてはいられないので、自分の恋しく思う心の千分の一でも、なぐさめられるだろうかと、吾妹子がいつも出て見ていた輕の市に、たたずんで耳をすましてみると、なつかしい人の声も聞けず、道行く人も、一人も似た人が通らないので、何とも仕方がなく、妹の名を呼んで、袖を振ったことである。 (文学大系頭注207)

#### 短歌二首

- 208 秋山の 黄葉を茂み 惑ひぬる 妹を求めむ 山道知らずも  
209 黄葉の 散りゆくなへに 玉梓の 使を見れば 逢ひし日思ほゆ

人麿は妻、依羅娘子(よさみのおとめ)を石見國に残して単身上京した。当時の婚姻は妻の家に通っていた形だったので人麿は妻を石見國に置いて一人だけの上京だったのは当然なことである。京で新しく通った妻が「輕」の妻である。その死に対して、題詞は「泣血哀慟して」と伝える。

人麿はこの歌を奈良で詠んだという理解が一般的である。歌には「畝傍の山」が歌われている。ただ「畝傍山」と言えばその山は香春町の香春岳のことであるが、奈良にも「畝傍」と呼ばれている山があったことは52番歌の歌詞からわかる。奈良の畝傍は万葉52番歌「藤原宮の御井の歌」で「畝傍のこの瑞山は日の緯の大御門に瑞山と山さびいます」と歌われている。人麿の輕の妻の歌で歌われた「畝傍」がこの奈良の畝傍である可能性はある。この場合は人麿は奈良にいたことになる。「輕の路は」「輕の市に」と歌われている「輕」は通常、奈良県橿原市大輕と想定されている。「輕」の妻への挽歌は一首ではない。他に二首ある。

- 210 うつせみと 思ひし時に 取り持ちて わがふたり見し 走出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど たのめりし 兒らにはあれど 世の中を 背きしえねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白栲の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 吾妹子が 形見に置ける みどり兒の 乞ひ泣くごとに 取り与ふ 物し無ければ 男じもの 脇ばさみ持ち 吾妹子と 二人わが寝し 枕づく 婦屋のうちに 晝はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに 戀ふれども 逢ふ因をなみ 大鳥の 羽易の山に わが戀ふる 妹は座すと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 吉けくもぞなき うつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば

#### 短歌二首

- 211 去年見てし 秋の月夜は 照らせれど 相見し妹は いや年さかる  
212 衾道を 引手の山に 妹を置きて 山路を行けば 生けりともなし

或る本の歌に曰はく

- 213 うつそみと 思ひし時に たづさへて わがふたり見し 出立の 百枝槻の木 こちごちに 枝させるごとく 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど たのめりし 妹にはあれど 世の中を 背きしえねば かぎるひの 燃ゆる荒野に 白栲の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい行きて 入日なす 隠りにしかば 吾妹子が 形見に置ける 緑子の 乞ひ泣くごとに 取り委する 物しなれば 男じもの 脇ばさみ持ち 吾妹子と 二人わが寝し 枕づく 婦屋のうちに 晝は うらさび暮らし 夜は 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに 戀ふれども 逢ふよしを無み 大鳥の 羽易の山に 汝が戀ふる 妹は座すと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し よけくもぞなき うつそみと 思ひし妹が 灰にてませば

### 短歌三首

- 214 去年見てし 秋の月夜は 渡れども 相見し妹は いや年離る  
215 衾道を 引手の山に 妹を置いて 山道思ふに 生けるともなし  
216 家に来て わが屋を見れば 玉床の 外に向きけり 妹が木枕

人麿の嘆きは尋常ではない。軽の妻との間には子どもができていた。「吾妹子が 形見に置ける みどり兒の 乞ひ泣くごと」と歌っている。妻が亡くなった時、子どもはまだ幼い。人麿は妻への挽歌を奈良橿原市の大軽町で歌ったのであろうか。



### 天武天皇は太宰府に居た

日本書紀神武天皇は九州から奈良に東征したと読まれている。現代地図の地名で読めば、そのように読むのもやむをえない。故に、神武以降、天皇家は奈良に実在したという歴史観が形成されてきた。しかし、日本書紀には天皇家は奈良に実在したのではないと読むことができる天皇紀がある。天武紀上下である。この両巻の舞台は奈良ではないと、論理的に読むことができる。天武紀下の多くを占めるのは筑紫記事である。これらの筑紫記事は天武が筑紫に居たことの証文である。また、天武が奈良ー筑紫を往復したという記事記録は全くない。つまり、天武は北九州に留まり、九州から外に出ていないのである。

いや、そんなはずはない。天武紀下には「飛鳥」「川原寺」「大官大寺」などの地名や寺号が登場するではないか。これらは奈良に天武が居たことを実証しているのではないか。筑紫にこれらの地名や寺は現存しない。奈良明日香は古来より飛鳥の地名で呼ばれてきたのではないか。

このように考えるのは無理はないが、「飛鳥」という地名や、「川原寺」「大官大寺」などの寺号は、天武が奈良に居たことを実証する史料とはならない。「飛鳥」とは北九州に実在した九州天皇家の地名である。「近つ飛鳥」

「遠つ飛鳥」は九州天皇家の説話から付けられた北九州の古代地名である。天武が即位した「飛鳥浄御原宮」は北九州の飛鳥に由来する宮の名前である。天武紀下に「飛鳥」が登場するが、この地名は天武が奈良に居たことを証明する記事ではなく、逆に天武は北九州に居たことを証明する記事となる。

では、「川原寺」はどうか。「川原寺」は奈良にあるではないか。しかし、天武朱鳥元年四月に、「新羅からの客の接待のため川原寺から伎楽を筑紫に運んだ」という記録がある。この「川原寺」は奈良の川原寺ではない。奈良から伎楽を筑紫に運んだのではない。大宰府の川原寺から筑紫(博多)に伎楽を運んだという記事なのである。天武紀の「川原寺」も天武が奈良に居たことを証明するのではない。反対に、天武は北九州に居たことを証明する。天武紀には他の天皇紀にはない特異な記事がある。例えば宮殿の建物である。

天武四年:大學寮・陰陽寮・外寮寮・占星臺

九年:向小殿・大殿

十年:向小殿・内安殿・外安殿

十一年:造法令殿

朱鳥元年:御窟院

このような名前の建物は、それまでの日本書紀には登場していない。天武紀に何故このような名前の建造物が急に登場したのか。それは天武の時に生活環境一変したからである。其れまでの天皇は「宮」に住んでいた。ところが、天武は壬申の乱に勝利して、それまで日本國天皇家朝廷が使用していた京を手に入れた。それが太宰府である。太宰府には大極殿を中心に多くの役所が集まっていた。天武は、田川市の「飛鳥浄御原宮」で即位を宣言した後、太宰府に遷った。この京で国政を掌ったのである。故に、天武紀には、それまでの天皇紀にはない独特の用語が登場する。「大極殿」をはじめ、「向小殿」「造法令殿」などは太宰府に実在した宮殿名、役所名であった。天武はこれらの行政府の中心である大極殿に居たのである。

持統紀は、当然、天武と行動を共にした皇后持統の記事記録である。持統紀の前半は天武紀と同じ、大宰府の記事である。ところが、天武が亡くなり、皇太子草壁が亡くなった持統の後半生の記事は大宰府ではない。奈良である。持統は太宰府から奈良に遷居したのである。近畿天皇家は持統に始まる。

日本書紀が持統紀で終わるのはこれが理由である。もやは、歴史は現代である。北九州に於ける九州天皇家の物語は終わった。日本書紀の使命は現代の歴史を記録することではない。過去の歴史記録を作ることであった。持統が奈良に移ったのちの近畿天皇家史は現代史である。これは日本書紀の任務ではない。故に、持統紀を以て日本書紀は終了するのである。

## 人麿の「軽の妻」と天武紀の「軽」は同じ

「軽」とはどこか。私たちは、今、歌詞だけでは、「軽」がどこか明確には知ることはできない。しかし、おそらく当時の人々は「軽」をよく知っていたのであろう。歌に歌われる地名は有名な地名が多い。人麿の歌によって「軽」という町の名前は、あまねく、人が知ることになったのかもしれない。この「軽」が天武紀に登場する。

- ・天武十年(681)冬十月の丙寅朔(1日)に、日蝕えたり。
- ・癸未(18日)に、地震る。
- ・乙酉(20日)に、新羅、沙喙一吉、食金忠平・大奈末金、壺世を遣して、貢調れり。金・銀・銅・鉄・錦・絹・鹿皮・細布之類、各数有り。別に天皇・々后・太子に献る、金・銀・錦霞・幡・皮の類、各数有り。
- ・庚寅(25日)に、詔して曰はく、「大山位より以下、小建より以上の人等、各意見を述せ」とのたまふ。
- ・是の月に、天皇、広瀬野に蒐(けみ)したまはむとして、行宮構り訖り、装束既に備へつ。然るに車駕、遂に幸さず。唯し親王より以下及び郡卿、皆軽市に居りて、装束せる鞍馬を檢校ふ。小錦より以上大夫、皆樹の下に列り坐れり。大山位より以下は、皆親ら乗れり。共に大路の隨に、南より北に行く。
- ・新羅の使者、至でて告げて曰さく、「国の王薨せぬ」とまうす。(日本書紀天武天皇十年)

これらの記録は大宰府の記録である。18日の地震は大宰府の地震である。筑紫の地震と書かれている記事と同じである。十月に天武が「蒐(けみ)したまはむ」としたので、朝廷全員が「広瀬」に集合した。天武の車駕は

来なかったが、親王より以下及び郡卿は、皆、「軽市」に居て、装束した鞍馬を檢校した。

- (1) 日本書紀では「軽」ではなく「軽の市」である。「軽」では市がたっていた。
- (2) 人麿の歌でも「吾妹子がやまず出で見し 軽の市に」と「軽の市」が歌われている。
- (3) 人麿の妻が通った「軽の市」と天武紀の「軽の市」とは同じである。
- (4) 天武紀は太宰府の記録である。「共に大路の隨に、南より北に行く。」と記録された「大路」とは条坊都市太宰府の「大路」である。この「大路」とは朱雀大路のことであろう。朱雀大路の近くに「軽」という町がありそこでは大きな市が開かれていた。
- (5) 人麿の妻は「太宰府の軽」に住んで、「市」に通っていた。
- (6) 人麿は石見國に妻を残して「上り来る」時に歌を歌っている。有名な「石見の海」の歌である。この歌に歌われた「石見國」とは九州天皇家の石見國、苅田である。ここが人麿の故郷であった。人麿は九州天皇家石見國で大きくなり、妻を娶った。その妻と別れて上り来た。「上り来る」とは当然「京へ上り来る」という意である。問題はこの「京」である。「軽の妻」の歌は、人麿が上京したのは太宰府であったことを明らかにしている。人麿は首都太宰府の高官だった。人麿の第二夫人と云うべき妻はその太宰府の「軽」に住んでいた。

## 人麿の妻が住んだ「軽の市」は筑紫野市二日市

人麿の妻は太宰府に住んでいた。その地名は「軽」であった。この地名は現在太宰府には残っていない。だがあきらめるのはまだ早い。手がかりはないとはいえない。「軽」には市が立っていた。日本書紀が記録しているのだから、有名な市だったのであろう。大きな市が立っていた場所は現在でもその名が残っていることもある。全国的に見ても四日市、八日市、十日市などと残っている。では、太宰府に市がつく町名がのこっているであろうか。私たちが幸運ならば残っているかもしれない。

太宰府には二日市がありました。その場所は太宰府朱雀大路の側である。以下、二日市中央商店街のHPを拝見させていただくことにしましょう。

## 二日市という地名の由来～

大勢の売り手と買い手が一所に集まって取引をしたことから市が始まり、その市を毎月、二のつく日に行うことから『二日市』と呼ばれるようになりました。これが二日市の名前の由来です。定期市(二日市、四日市、五日市など)の多くは、鎌倉時代に始まりました。『二日市』の名前が最も古い記録に登場するのは、1479年(文明11年)ですが、それ以前から市は行われていたようです。

7世紀後半に大宰府が設置されました。大宰府は、奈良・平安時代を通して京以外では最大の役所として九州を治めました。平城京の都にならって、大宰府政庁を中心にした条坊制(東西24坊、南北22条)を取り入れた都市計画がなされました。大宰府政庁から南に中心となる朱雀大路(すざくおおじ)がのび、これを境に左郭(東)と右郭(西)とに分かれます。平城京と平安京には、左京、右京南部の川のほとりに東西の市がありました。二日市は朱雀大路推定線の東、左郭の南部にあり、鷺田川のほとりにあります。大宰府と二日市の位置関係は、京の東西の市の位置関係とよく似ているので、二日市は大宰府政庁の市町(いちまち)であったといえます。 (<http://www.futsukaichi-shotengai.jp/rekishi.html>)

筑紫野市二日市は、筑紫野市役所の近く、筑紫野市の中心繁華街である。古代太宰府の地図で見れば左郭二坊十五条付近に位置する。そこは太宰府政庁から南に下る朱雀大路のすぐ側に位置して太宰府を東南から西北に流れる鷺田川のほとりである。川の側に市が立つのは自然なことである。HPで云われているように二日市が太宰府の市町だったと考えられる。そうすると、二日市の歴史は古く、人麿の時代に遡る。二日市が「軽の市」だった可能性は高い。

- ・天武十年唯し親王より以下及び郡卿、皆軽市に居りて、装束せる鞍馬を檢校ふ。小錦より以上大夫、皆樹の下に列り坐れり。大山位より以下は、皆親ら乗れり。共に大路の隨に、南より北に行く。

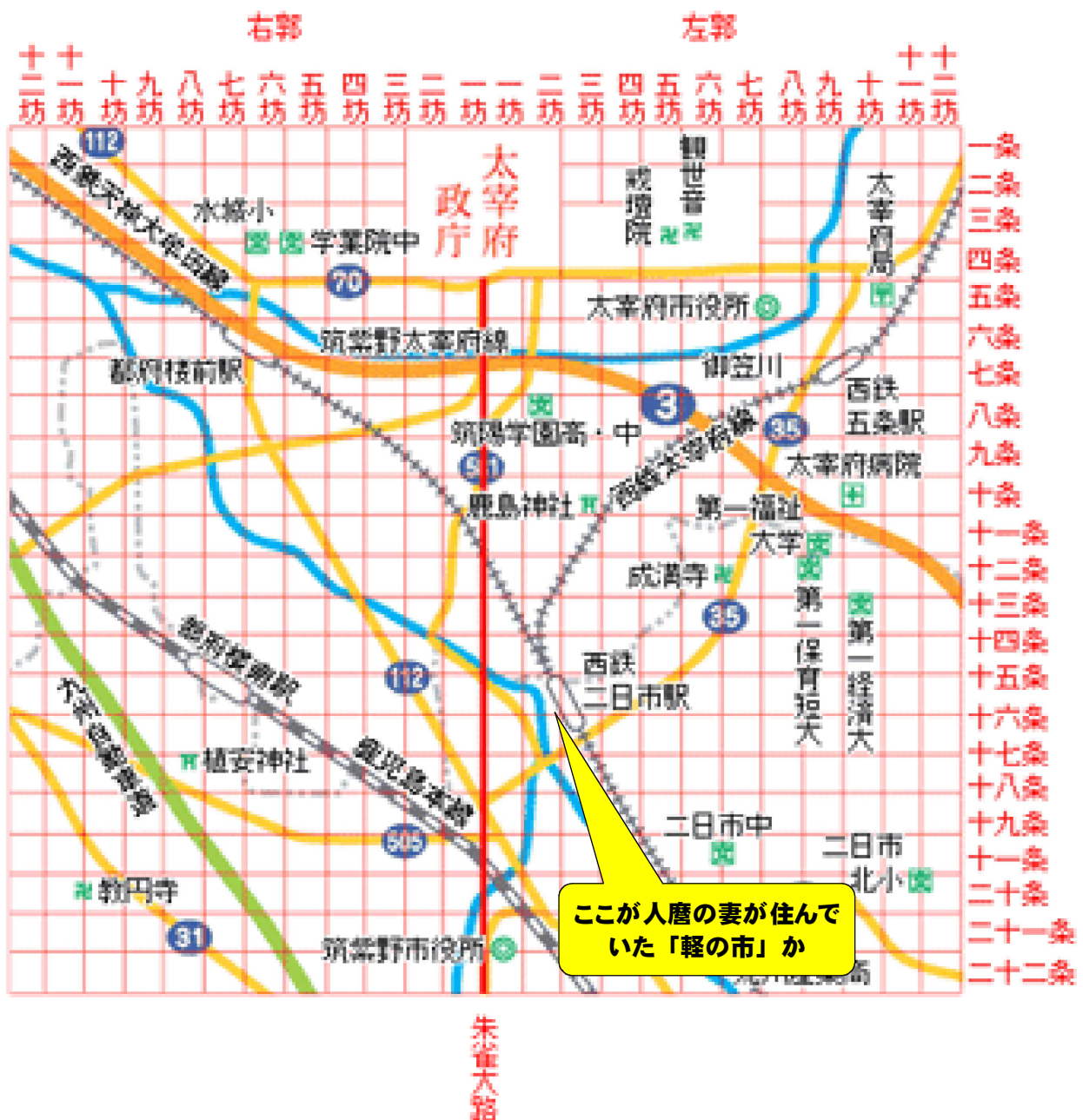
二日市が「軽の市」と想定すれば、「軽の市(二日市)」から「大路(朱雀大路)」を北に向かって進み太宰府政庁へ戻っていったという地理とぴたりあう。



人麿の妻は太宰府の「軽(二日市)」に住んでいた。「軽」は太宰府最大の市場であった。其処には周りの村々から、船に商品を積んで売りに来ていた。京(太宰府)の人々は、皆、この市に出かけた。人麿の妻もこの市にしばしば出かけ、人麿と子どものために買い物をしていた。人麿の京(太宰府)での生活は、軽に住む妻と幼い子どもによって支えられていた。あろうことか、幼子を残し、若くして妻が亡くなった。妻の死に、人麿が泣血哀働したのも当然だったと思われる。

天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み  
 数多く行かば 人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かざる 岩垣淵の 隠りの  
 み 戀ひつつあるに (207番歌)

吾妹子が 形見に置ける みどり兒の 乞ひ泣くごとに 取り与ふ 物し無ければ 男じもの 脇ばさみ持  
 ち 吾妹子と 二人わが寝し 枕づく 嬬屋のうちに 晝はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆け  
 ども (210番歌)



## 吉備津采女挽歌

吉備の津の采女の死し時、柿本朝臣人麿の作る歌一首

217 秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 思ひをれか 桡縄の 長き命を 露こそば  
朝に置いて 夕は 消ゆといへ 霧こそば 夕に立ちて 朝は 失すといへ 梓弓 音聞く我れも おほに  
見し 事悔しきを 敷桡の 手枕まきて 剣刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は さぶしみか 思  
ひて寝らむ 悔しみか 思ひ戀ふらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと

吉備津とは古代吉備、神武が東征に出発した吉備、仁徳天皇が皇后に偽って逢いに行った吉備、彦島西山町である。九州天皇家の吉備(彦島)出身の采女が持統の宮へ仕えていた。持統の宮は近江大津宮である。彼女は若くして亡くなったのであろう。吉備津の采女への挽歌の作歌場所は小倉南区の近江大津宮である。

短歌二首

218 楽浪の 志賀津の子らが 罷道の 川瀬の道を 見ればさぶしも  
楽浪(ささなみ)の志賀津の子らの葬送の道の川瀬の道を見れば寂しいことである。

219 天数ふ 大津の子が 逢ひし日に おほに見しかば 今ぞ悔しき  
亡くなった大津の子に逢った日に、しっかり見なかったことが今悔やまれる。

楽浪の志賀津とは九州天皇家の近江にあった港である。この港の側に九州天皇家の大津の宮が存在した。その宮に吉備津から「采女」が来ていた。「大津の子」も「志賀津の子」も「采女」も同じである。彼女が亡くなった。そして大津の宮から「川瀬の道」を通して墓所に送られた。

## 讃岐挽歌

讃岐の狭岑の島に、石の中に死れる人を観て、柿本朝臣人麿の作る歌一首

220 玉藻よし 讃岐の國は 國からか 見れども飽かぬ 神からか ここだ貴き 天地 日月とともに 足り行か  
む 神の御面と 継ぎ来る 中の水門ゆ 船浮けて 我が漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに 沖見れば  
とみ波立ち 辺見れば 白波騒く 鯨魚取り 海を畏み 行く船の 梶引き折りて をちこちの 島は多け  
ど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 廬りて見れば 波の音の 繁き浜辺を 敷桡の 枕になして 荒床  
に 自臥す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉梓の 道だに知らず おほ  
ほしく 待ちか恋ふらむ はしき妻らは

玉藻とは若布のことである。よい若布の採れる讃岐の國は、國がよい故か、見ても見飽きぬ。または國の神がよい故か、天地、日月とともに満ち足り榮えていくであろう。この島は身一つで面四つと伝わってきたように、「中の港」を船を浮かべて過ぎてくれば、いつも同じ時に吹く風が雲を走らせ、沖を見ればざわざわと波が立ち、岸を見ると白波が音を立てている。捕鯨の海を畏れ、捕鯨船が梶を引きたわめる。あちこちに島は多いけれど、名高い「狭岑(さみね)の島」の荒磯に廬(いおり)を作って住んでみれば、波の音がしきりに聞こえる浜辺を枕をして荒々しい浜辺の床に伏しているあなたの家族が分かれば行って教えてあげることできるが、妻が知ることができれば来て問うだろうが、ここへ来る道すら知らず、不安な日々の中、あなたの帰りを待ち焦がれているであろうに。愛しい妻が。

人麿は701年か702年に九州天皇家の讃岐國に流された。讃岐國が香川県ではなく九州天皇家の讃岐國だと特定できるのは歌詞の「中の水門(みなと)」である。「上の水門」「中の水門」「下の水門」と三つの湊を持つ瀬戸は彦島小戸である。九州天皇家の讃岐は伊邪那岐命、伊邪那美命以来、天(あま)王朝の中心國の一つであった。そういう意味で人麿は「神からか ここだ貴き 天地」と詠ったのである。人麿はその伝統の讃岐國の「狭岑の島」に流された。

この歌は通常、旅の歌と読まれている。歌だけを読めばそのように読めるかも知れない。だが石見國風土記は人麿は四國に流されたと記録している。四國とは九州天皇家の四國である。國生み神話の中に「伊豫二名島」がある。この島には「身一つ、面四つ」と書かれたように四つの弥生集落が存在した。それが「土佐國」「伊豫國」「讃岐國」「粟國」である。人麿が流された四國とは「伊豫二名島」の讃岐國である。「伊豫二名島」は彦島

老町である。「中の水門」とは彦島の小戸の中央にあった港である。

歌中に「狭岑の島の 荒磯面に 廬りて見れば」とある。これは「島の磯辺に住んでみれば」という意味だが、旅の途中で宿泊したという気楽な意味ではない。流人として暮らし始めたという厳しい意味である。

人麿の心は「時つ風 雲居に吹くに 沖見れば とみ波立ち 辺見れば 白波騒ぐ」と不安である。とても旅の気分ではない。讃岐の嶋に暮らし始めてみると、そこには同じ境遇の流人が居た。彼はもう死んでいた。この流人の妻はその帰りを待っているであろう。流人の家に分かれれば行って教えることもできるがそれも分からない。

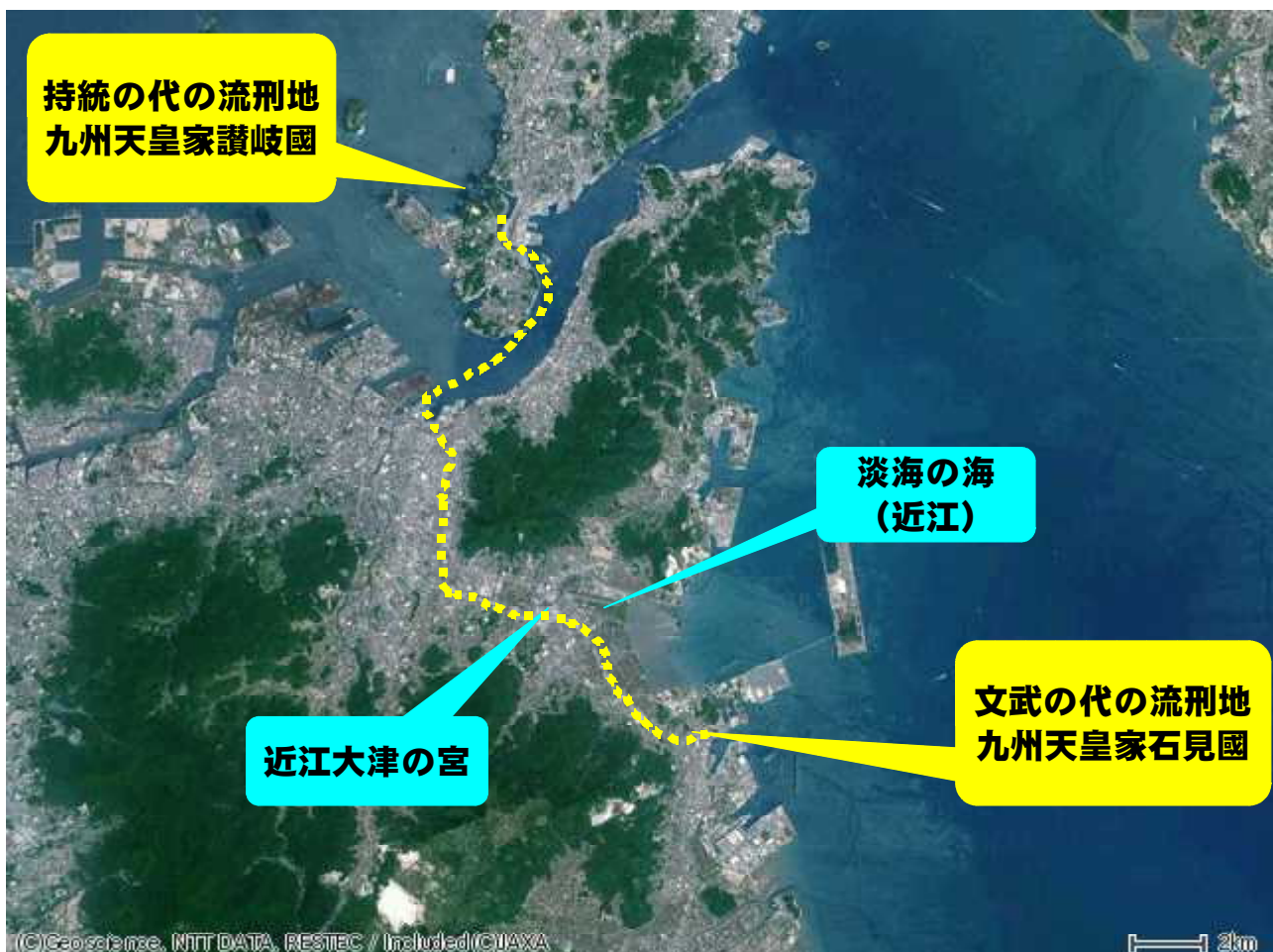
人麿が讃岐の島の磯に死んでいる流人を見て、その妻は何も知らず帰りを待っているであろう、と思い遣ったのは自分の境遇を重ね合わせたからである。自分もまた同じように此処で果てるのか。その気持ちがこの歌となった。死人の事を歌いつつ人麿は我が身を歌っていたのである。そして人麿もまた妻と会わずに死んでいった。

221 妻もあらば 摘みて食べまし 沙美の山野の 上のうはぎ 過ぎにけらずや

222 沖つ波 来寄る荒磯を 敷栲の 枕とまきて 寝せる君かも

人麿は持統の代に讃岐國に流された。どのような罪で流されたかは不明である。持統王朝は複雑な構成だったと思われる。壬申の乱に勝利し、日本國天皇家を滅ぼした天武は皇親政治をめざした。しかし太宰府から奈良に遷った持統は日本國の行政官僚の力を重用せずには国政を運営できなかつたであろう。特に藤原氏一門の力は朝廷内で大きくなっていった。人麿はこの中でどのような罪を受けたのであろうか。

人麿が讃岐國狭岑の島に流された翌年か翌々年の703年に持統は亡くなった。ところがこの偉大な女帝の死を傷む挽歌を万葉集は掲載していない。亡くなった持統の挽歌は誰が詠んだのであろうか。持統への挽歌を詠むとすれば人麿こそが最もふさわしい。彼を置いて他にはいない。だが人麿は詠んではいない。なぜなら人麿はすでに流刑に身の上だった。しかし人麿は流刑地讃岐で持統崩御の知らせを聞いたであろう。



文武の代に人麿は今度は讃岐國(彦島)から石見國(苅田)に流されることとなった。讃岐から石見國(苅田)への流刑路は小倉南区長野を通る。その途中に近江大津の宮があった。近江大津宮はかつて持統が住んだ宮である。近江大津宮は九州天皇家近江天皇が住み、天武も持統も住んだ九州天皇家歴代の宮であった。しかし、この大宮は689年持統が藤原京遷都以来、10余年の歲月、誰も住まず廢墟と化していた。人麿が見たのは廢墟の九州天皇家の宮だった。

#### 近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本朝臣人麿の作る歌

29 玉櫛 畝傍の山の 櫃原の 日知の御代ゆ あれましし 神のことごと 梅の木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 倭をおきて あをによし 平山を越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 百磯城の 大宮處 見れば悲しも

近江大津宮から少し東に行くと、そこは淡海(あまの)の海である。曾根の淡海(あまの)の海は干潟(あまの)の海である。千鳥(あまの)が干潟(あまの)に渡り来て、えさをあさっている。夕方になると、干潟(あまの)に波が押し寄せてくる。千鳥(あまの)が鳴き騒ぐ。昔と変わらない風景だ。淡海(あまの)は人麿(あまの)の青春(あまの)の海(あまの)だった。希望(あまの)の海(あまの)だった。流刑(あまの)の身(あまの)となってもそれだけは変わらない。こうしてまた名歌(あまの)が生まれた。

#### 266 淡海(あまの)の海 夕波(あまの)千鳥(あまの) 汝(あまの)が鳴けば 情(あまの)も思奴(あまの)に 古思(あまの)ほゆ

淡海(あまの)の海(あまの)、夕波(あまの)が押し寄せてくる。千鳥(あまの)が鳴く。その鳴き声(あまの)を聞けば私の心(あまの)はあかるくなり、九州天皇家(あまの)の良き昔(あまの)の代(あまの)が思い出(あまの)されてくることよ。

## 人麿挽歌

柿本朝臣人麿、石見國に在りて臨死(あまの)らむとする時、自ら傷(あまの)みて作る歌(あまの)一首

223 鴨山(あまの)の 岩根(あまの)し枕(あまの)ける われをかも 知らにと妹(あまの)が 待ちつつあるらむ

鴨山(あまの)の磯(あまの)辺(あまの)で私は岩(あまの)を枕(あまの)に死(あまの)んでいく。私がここに眠(あまの)っていることを誰(あまの)が私の帰(あまの)りを待(あまの)っている妻(あまの)に告(あまの)げてくれるであろうか。

人麿(あまの)が配所(あまの)・石見國(あまの)で臨終(あまの)に詠(あまの)った歌(あまの)は、配所(あまの)・讃岐(あまの)(彦島)で死者(あまの)を詠(あまの)った歌(あまの)と瓜(あまの)二つ(あまの)である。人麿(あまの)の死(あまの)については石見國(あまの)の風土記(あまの)に記録(あまの)がある。風土記(あまの)が人麿(あまの)の最後(あまの)を伝える。

## 石見國風土記

### 石見國風土記 人丸

石見(あまの)の國(あまの)の風土記(あまの)に曰(あまの)はく、天武(あまの)三年(あまの)八月(あまの)、人丸(あまの)、石見(あまの)の守(あまの)に任(あまの)ぜられ、同(あまの)九月(あまの)三日(あまの)、左京(あまの)大夫(あまの)正(あまの)四位(あまの)上行(あまの)に任(あまの)ぜられ、次(あまの)の年(あまの)三月(あまの)九日(あまの)、正(あまの)三位(あまの)兼(あまの)播磨(あまの)の守(あまの)に任(あまの)ぜられる。云々。爾(あまの)來(あまの)、持統(あまの)・文武(あまの)・元明(あまの)・元正(あまの)・聖武(あまの)・孝謙(あまの)の御宇(あまの)に至(あまの)り、七代(あまの)の朝(あまの)に仕(あまの)へ奉(あまの)りし者(あまの)か。ここ(あまの)に、持統(あまの)の御宇(あまの)、四國(あまの)の地(あまの)に配流(あまの)せされ、文武(あまの)の御宇(あまの)、東海(あまの)の畔(あまの)に左遷(あまの)せらる。子息(あまの)の躬(あまの)都(あまの)良(あまの)は隱岐(あまの)の嶋(あまの)に流(あまの)され、謫所(あまの)に死(あまの)去(あまの)にき。云々。

人麿(あまの)は天武(あまの)三年(あまの)(674)八月(あまの)、石見(あまの)の守(あまの)に任(あまの)命(あまの)され、翌(あまの)年(あまの)、播磨(あまの)の守(あまの)に任(あまの)命(あまの)された。この石見國(あまの)は九州天皇家(あまの)石見國(あまの)(苅田町)である。播磨國(あまの)も九州天皇家(あまの)の播磨國(あまの)(行橋市)である。人麿(あまの)は天武(あまの)の代(あまの)の始め(あまの)に故郷(あまの)石見國(あまの)の長官(あまの)に任(あまの)命(あまの)された。天武(あまの)の四年(あまの)の春(あまの)正月(あまの)の記事(あまの)がある。

四年(あまの)春(あまの)正月(あまの)の丙午(あまの)朔(あまの)に、大学寮(あまの)の諸(あまの)学生(あまの)・陰陽寮(あまの)・外(あまの)薬寮(あまの)及び舍衛女(あまの)・墮羅女(あまの)・百濟王(あまの)善光(あまの)・新羅仕丁(あまの)等(あまの)、葉(あまの)及び珍(あまの)異(あまの)しき等物(あまの)を捧(あまの)げて進(あまの)る。丁未(あまの)(2日)に皇子(あまの)より以下(あまの)、百寮(あまの)の諸(あまの)人(あまの)、拜朝(あまの)む。戊申(あまの)(3日)に、百寮(あまの)の諸(あまの)人(あまの)、初位(あまの)より以上(あまの)、進(あまの)薪(あまの)る。庚戌(あまの)(5日)に、始めて占星台(あまの)を興(あまの)つ。壬子(あまの)(7日)に、群臣(あまの)に朝廷(あまの)に賜(あまの)宴(あまの)ふ。壬戌(あまの)(17日)に、公卿(あまの)大夫(あまの)及び百寮(あまの)の諸(あまの)人(あまの)、初位(あまの)より以上(あまの)、西門(あまの)の庭(あまの)に射(あまの)ふ。是(あまの)の日(あまの)

に大倭国、瑞鷄を貢れり。東国、白鷹を貢れり。近江国、白鷄を貢れり。戊辰(23日)に、諸社に祭幣る。

天武は四年の正月を初めて太宰府で迎えたと思われる。「大学寮の諸学生」「陰陽寮・外寮寮及び舎衛女」とは太宰府の宮域に存在した役所であろう。これまでの日本書紀の天皇の宮には登場しない名前である。またここにはめでたい「瑞鷄」を献上した國を「大倭國」と記載している。「大倭國」とは日本國天皇家の國名である。

天武は壬申の乱に勝利して田川市の九州天皇家の宮で即位した。天武はそれまで太宰府の支配者であった日本國天皇家に代わって新しく太宰府の支配者となった。天武は三年の末に太宰府に遷り、四年の正月を太宰府大極殿で迎えたのであろう。人麿はこの時期に石見國の國守に任ぜられたことになる。

石見風土記録では人麿は持統の世に「四國の地」に流されたと伝える。「四國」とは九州天皇家の「四國」で、彦島に存在した「讃岐」「伊豫」「土佐」「粟」の四つの國を「四國」といった。人麿が流されたのはその「讃岐國」である。さらに、石見國風土記は文武の世に「東海の畔」に流されたと記録している。この「東海」を静岡県地方と読むことはできない。石見國風土記の中に「東海の畔」と記録されているのであるから、この「東海」は当然、「石見國の東海」である。この読みを曲げてはいけなし、無視してもいけない。人麿は石見國の東海の畔で死んだ。これが事実である。

人麿の最後を伝えている史料は石見國風土記と万葉集の二つである。万葉集題詞は石見國で死んだと明確に書いている。一方、石見國風土記は「文武の御宇、東海の畔に左遷せらる」とだけ書く。そこで死んだとは明記していないが、人麿は石見國で死んだと読まなければならないであろう。

人麿臨終の地・石見國が島根県だと想定すると「東海」は意味不明となる。島根県の海は北の海で、東に海はない。石見國風土記が「北海の畔」と記録していれば問題はないが、石見國風土記では「東海の畔」と明記している。万葉集も石見國風土記も人麿が死を迎えたのは「石見國」である。しかし、この石見國が島根県益田だと判断すると、「東海」が不可解となる。人麿臨終の地は石見國であるが、この石見國は益田ではない。東海に臨む九州天皇家の石見國、苅田である。人麿は周防灘に面した苅田町の島の畔で亡くなった。

## 人麿の妻 依羅娘子の歌

柿本朝臣人麿の死し時、妻依羅娘子の作る歌二首

224 今日今日と わが待つ君は 石川の貝に 交りてありと いはずやも

依羅娘子の224番歌を取り上げてみれば、不思議な歌である。彼女は今、石見國に居る。人麿もまた石見國に居る。二人は同じ國に居る。二人の距離はそんなに離れているわけではない。なのに、なぜ、妻はただ待っているのか。妻は人麿が石見國に居ることは分かっている。では、会いに行けばよいではないか。万葉集の歌の理解だけでは納得がいかないのである。

だが、ここに石見國風土記の記録を挿入すると、新たな情景が見える。人麿はこの時、故郷石見國に流されて帰って来ていたのである。人麿の故郷、石見國、妻と青春を過ごした石見國、その石見國の東海の畔に人麿は罪人として流されてきた。人麿は妻の家に帰りたくとも帰ることができなかった。妻・依羅娘子は人麿が流罪となって故郷へ戻ってきたことを知っていた。帰って来たにもかかわらず、まだ私の所に帰ってこない人麿を待ちわびていたのではない。

「わが待つ君は」という歌の意は、人麿が罪を許されて帰ってくるのを待っていたということである。彼女は「赦免は今日だろうか、明日だろうか」と待っていた。消息が分からない人麿をただ待っていたのではない。彼女は故郷に流されて帰ってきた夫の赦免を待っていた。だが、妻の願いも空しく、人麿は東海の配所・石見國(苅田)で罪人のまま死んでいった。故郷石見國苅田に帰ってきた人麿は、妻と会うこともなく、妻に別れを告げることなく死んだ。人麿は讃岐の島で死んだ罪人のように、妻は自分の死を知らぬままずっと待っているであろうとその切なさを思いやりながら死んでいった。

225 直の逢ひは 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つつ偲はむ

今日許されて帰ってくるか。明日は許されて帰ってくるかと待っているのに石川の貝に交じって死んでいるというではありませんか。もはや生きてお目にかかることはできない。せめて石川の上に立ちのぼってくる雲を見てあなたを偲びましょう。

感情を抑えているが、なんとも切ない歌である。すぐそこまで帰ってきているのに、私の元へは帰って来ることができない。絵も写真もなく、偲ぶすべもない時代である。石川に立ち昇る雲をあなたと偲びましょう。

文武の代に流された石見國は人麿の故郷だった。妻、依羅娘子との別離を詠った石見國である。人麿は流されてここに帰ってきた。妻はまだ生きている。石見國風土記は人麿は東海の畔で亡くなったと記録した。東海とは周防灘である。人麿は周防灘の荒波が押し寄せる苅田の「石川」の河口で死んだ。

## 丹比の真人の歌

丹比の真人 柿本朝臣人麿の意に擬へて報ふる歌一首

226 荒波に 寄りくる玉を 枕に置き われここにありと 誰か告げなむ

周防灘の荒波に打ち寄せられてきた玉のような石を枕にして私がここに死んだと誰か妻に告げてくれるだろうか。(心配することはない我が友よ。私、丹比真人が代わってあなたの妻に知らせましょう。)

人麿の心を汲んで丹比真人が妻に歌をおくる。作歌者丹比真人は名前が書いていないので、誰か特定できないという。日本書紀持統四年に丹比嶋真人が右大臣に任命された記事がある。万葉編纂者はこの歌の作歌者が丹比氏の誰か知っていたに違いない。知っていたのに書かなかった。なぜなら丹比氏が右大臣だったからではないだろうか。丹比真人は人麿の最後を詳しく知ることができる立場にあったと思われる。

狭岑の島の死人を見てあなたは、「その死を妻に伝える人は誰もいない」と、詠ったが、その心配はいらない。あなたは狭岑の島の死人と同じではない。あなたには親友の私がいる。あなたが周防灘の畔、苅田の鴨山の磯に眠っていることは、私があなたの妻に伝えてあげましょう。

人麿は苅田町の小高い丘の麓に眠っている。



## 志貴親王挽歌

万葉集第一巻・第二巻が最初の万葉集である。原万葉集と呼ぶべき第一巻・第二巻の最終を飾る歌として万葉編者はどんな歌を用意したのか。それは元明天皇の次、元正天皇の御代の志貴親王への挽歌である。

霊亀元年(715)次乙卯の秋九月、志貴親王の薨りましし時の歌一首 230番歌

梓弓 手に取り持ちて 丈夫の 得物矢手ばさみ 立ち向ふ 高円山に 春野焼く 野火と見るま  
でもゆる火を いかにと問へば 玉鉾の 道来る人の 泣く涙 霰(こさめ)に降りて 白妙の  
衣ひづちて 立ち留り われに語らく 何かも もとなとぶらふ 聞けば 哭(ね)のみし泣かゆ 語  
れば 心そ痛き 天皇の 神の御子の いでましの手火の光そ こだ照りたる

高円山に、春の野を焼く野火であろうと見るほど、たくさん燃えている火を、「あれはどういう火か」とたずねると、道を歩いて来た人は、泣き悲しむ涙が雨のように落ちて、着物を泥によごして、立ち止まって自分に話しているには、「どうしてお前はよしなくもそんな事をたずねるのか。それを聞くと胸が痛む。あれは天皇の御子様の御葬列の人々の手に持つ松明の光なのだ。あのようにたくさん照っているのは」  
(日本古典文学大系万葉集頭注)

数ある挽歌の中でこの歌ほど人々の悲しみが伝わってくる歌はない。「高円の野辺」と歌われた「高円」とは奈良高円山である。「志貴親王」は奈良高円山に埋葬された。「春野焼く野火」と歌われた「野火」は若草山の野焼きのことであろう。

何故、人々は、「志貴親王」の死をこれほど悼んだのであろうか。この歌は、「笠朝臣金村の歌集に出づ」と、後註は書いている。金村はよく分かっていない歌人であるが、頭注は、「天平5年(733)以前約20年にわたって作歌」と解説している。活躍したのは平城遷都以降である。

## 志貴親王は天武天皇の皇子

「志貴親王」とは誰か。通説では天智天皇の第七子とされる。天智天皇には四人の男の子がいた。「建皇子」「川嶋皇子」「施基皇子」「大友皇子」である。大友皇子は671年、壬申の乱で敗死した。川嶋皇子は持統9年(694)9月没。この歌の作歌者志貴親王とは、天智天皇の皇子、施基(しき)皇子であると、頭注は解説している。

だが、天武天皇の皇子にも、「磯城(しき)」という名の皇子がいる。母は宋人臣大麻呂の娘・檉媛娘である。万葉集第二巻の最後の挽歌に詠われた志貴親王とはどちらの皇子なのか。

万葉集第一巻の最終章は「寧楽宮」と標題がうたれている。「寧楽宮」とは平城京に作られた宮である。平城京は近畿天皇家が作った京である。それ以前、奈良に存在した京は藤原京である。この京は日本國天皇家が造った京である。690年、持統は九州から奈良に戻って、この藤原京大極殿で即位した。そして、新しい京(新益京)の造営に着手した。その京が平城京である。平城京ができあがったのは元明天皇の代である。万葉編者は持統天皇の次に元明天皇の代を設けていない。ただ「寧楽宮」とだけ書いて、近畿天皇家の代であることを示した。標題「寧楽宮」には万葉編者が抱いた「もはや、九州天皇家の代は終わった。」という悲しい思いが込められている。

万葉集第一巻の最後の歌は「寧楽宮」の代の「長皇子、志貴皇子と佐紀宮に俱に宴する歌」である。作歌者、長皇子とは天武の第四皇子である。九州天皇家の鎮魂を目的として編纂された万葉集第一巻は九州天皇家の皇子の歌で締めくくられている。

第二巻の最終の編集形式も第一巻と同じで、「寧楽宮」の代の歌である。万葉第二巻は相聞と挽歌で構成されているが、最後の挽歌の作歌者は書かれていない。だが、その挽歌は志貴親王への挽歌である。この志貴親王が長皇子が佐紀宮で俱に宴した志貴皇子であることにまちがいはない。では、天武の第四皇子、長皇子と宴を共にした志貴皇子が天武によって滅ぼされた天智天皇の皇子であろうか。万葉編者は第二巻をその天智天皇の皇子への挽歌でもって締めくくろうとしたのであろうか。

鹿持雅澄は「萬葉集古義」で、万葉の「志貴皇子」は天智天皇の皇子である施基皇子でなく、天武天皇の皇子である磯城皇子であろうと述べていると聞く。蓋し、慧眼というべきであろう。

志貴親王が亡くなったのは715年、元正天皇の元年である。もはや、九州天皇家は近畿天皇家にあってその存在を失いつつあった。九州天皇家鎮魂の歌集として編纂された万葉集の最後の最後を飾る歌は九州天皇家、天武天皇の皇子、志貴親王(磯城皇子)への挽歌となった。この志貴親王の死をもって、九州天皇家天武天皇の正統は途絶えてしまった。九州天皇家の人々は九州天皇家最後の皇子の死を悼み、悲しみ、日が落ちても、尚、皆、手に松明を掲げて、志貴皇子を高円山に送ったのである。

## 短歌二首

### 231番歌

高円の 野辺の秋萩 いたずらに 咲きか散るらむ 見る人無しに

高円の野辺の秋萩は、空しく咲いては散っていることであろうか。志貴親王のお墓にお詣りする人もいないので、野辺に咲く秋萩の花を見る人もない。

### 232番歌

三笠山 野辺行く道は こきだくも 繁に荒れたるか 久にあらなくに

三笠山の志貴親王のお墓へ通じる道は、こんなにも草が生えて荒れていることである。志貴親王が亡くなって、そんなに久しいことでもないのに



この短歌の無常の響きはどうでしょう。志貴親王が亡くなられてそんなに月日が経っていないのに、もう、高円のお墓に行く道は草が茂って荒れてしまっている。

荒れたる道は九州天皇家を象徴する。九州天皇家は忘れ去られていく。今はもう、近畿天皇家の御代なのだ。

万葉編者は近畿天皇家において消えていく九州天皇家の鎮魂として九州天皇家の御代の歌集を作った。

万葉第二巻は九州天皇家、志貴親王への挽歌でもって終わる。志貴親王への挽歌は九州天皇家への挽歌である。

玉鉾の 道来る人の 泣く涙 霰霖(こさめ)に降りて 白妙の 衣ひづちて 立ち留り われに語らく 何しかも もとなとぶらふ 聞けば 哭(ね)のみし泣かゆ 語れば 心そ痛き 天皇の 神の御子の いでましの 手火の光そ ここだ照りたる

九州天皇家の人々の心が詠われた哀切きわまる見事な挽歌である。

高円山のどこに志貴親王のお墓があるか、今、誰にも分からない。墓参に訪れる人は誰一人としていないが、毎年、秋になれば、高円山の志貴親王のお墓には秋萩の花が訪れ、九州天皇家最後の皇子の死を弔っている。

志貴親王は高円山のどこに埋葬されたのであろうか。通常、その陵は田原西陵と云われる、高円山の東南、奈良市須山町にある陵とされる。だが、ここは高円山とは云えまい。

奈良市白毫寺町に萩で名高い白毫寺がある。高円山の麓にあり、奈良市内を一望できる。志貴親王の宮があったと伝わるが、この寺が志貴親王の墓所として最もふさわしいと思われる。九州天皇家縁の人々が、手に松明を持ち、泣く泣く、野辺送りをした坂道は、白毫寺に通じるこの細い坂道だったのではなかろうか。





奈良白毫寺町

